
BABEL

詩之葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BABEL

【Nコード】

N7625M

【作者名】

詩之葉

【あらすじ】

- 地上は荒廃した。他ならぬヒトの手によって。地下へと逃げ延びた人々は、いつしか地上時代と変わらない生活を営んでいた。地下世界で生き延びることができた幸運な人々。遠い未来で「地上」を知らずに生きる人々。…そして再び世界の調和は乱れ始める。そんな中、ヒトによる人の心の支配が行われ、さらに人間同士に亀裂が生じる。人の『精神』の正体が暴かれた時代で、『平和』の意味を争う闘いが始まる。

序章

記憶

序章

記憶

一体、何時間経ったのだろう。

暗く、深い水の中に引きずり込まれていくように、体は常闇のなかに落ちていく。

…いや、昇っているのかもしれない。どこかへ向かって身体が漂っているのは確かだが、自分の意志ではどうにもならない。

もう、随分時間が過ぎた気がする。ふと、自分の掌を見る。右手の平には、赤い血糊がべとりとついていた。

…誰の血だ？

目を睜^{みは}り、瞼の中で目を凝らす。血の持ち主を思い出そうと、脳の神経細胞のなかに電気信号が飛び交うのが見える。電気の流れは目に見えるほどの輝きを放っている。しばらくすると、視界はモザイクで満たされ、眼が熱を帯び、痛みを伴い始めた。痛みには耐えられず、ゆっくりと瞼を開ける。

…俺は、何を忘れたのだ？

唇を動かさず、喉の奥で呟く。もし、口を開けてしまつたら、黒い水に侵され、魂を喰われると感じたのだ。冷たさも熱もなく、漠然と広がる、黒。宇宙になら星の瞬きがある。海の中になら、天より降り注ぐ陽の光の槍がある。ここには、静寂という魔物しかないな

い。さしずめ、自分の体は魔物の餌というところか。口を開け、息を吐いてしまったならば、命の息吹を求めて奴らは群がってくるに違いない。何故かは分からないが、この闇の正体を知っている気がしてならない。

もう一度、赤黒く染まった手の平を見つめた。痛みはない。不自然極まりないが、どうやら自分の怪我ではないようだ。ならば、誰が血を流した？ 誰が、誰に、何のために血を流させたのだ？ 脳みそが頭蓋の中で回転を始めた。眼のなかを電気の粒子が暴れ回る。

…止まれ！ 答えなんて出ない。出るわけがない。頼む、止まってくれ！ 今は何も考えたくない。

そう呟き、喉を鳴らしてみたものの、血を見て何の感情も起こらない自分に腹が立った。俺は冷酷な人間なのか？ 人が傷を負ったというのに、何も感じないというのか？ 心の中でため息が漏れるのを感じる。

…俺は、何だ？

脳の回転が止まる。今まで息をひそめていた漆黒の世界が、微かにさざめいたの感じた。一瞬の沈黙の間、心臓の拍動さえも聞こえなかった。不意に、自分の右手の異変に気がついた。…皮が剥がれかけているではないか。手首に環状の切れ込みが入り、そこから指先にかけてすべての上皮が浮き上がっている。

…壊死、か？

それにしておかしい。ならば、暗闇の捕食が始まったのだろうか。右手を顔の前へ持つてくる。

…皮膚に、切れ込み？

疑問が芽生えた瞬間、自分の左手は右手の剥がれかけた上皮をひつつかみ、乱暴に取り去っていた。

右手のあった場所に、再び右手が現れた。しかし、血についてはいなかった。剥がされてしまった皮膚が目の前に浮かんでいる。目を凝らし、正体を確認する。

…上皮だと思って剥いだ血まみれの皮は、極薄の手袋だった。無重力に似た空間の中でそれは浮かんでいた。よく見ると手袋の内側に、血以外のものを見つけた。どうやら文字のようだ。意味も何と理解できる。その文字は、こう示していた。

『最愛の人のために』

目で読み上げ、意味を理解した瞬間、再び脳が回転を始めた。頭蓋骨が燃えるように熱い。髪の毛が溶け頭皮が火膨れになったような心地がする。そのあまりの激痛に両手で頭を抱え、呻き声を上げそうになる。痛みを堪え、歯が砕けてしまいそうになるほど強く食いしばる。しかし決して口を開けてはならない。この世界に打ち勝つためには、闇に魂を差し出してはいけない。燃え盛る痛みの中でも、その信念は力強く輝いていた。体が空間のなかで何度も捻じれ回転する。もう、上下の見当がつかない。しかしどこを向こうともそこは闇だった。目の前を漂う闇は、俺の魂を喰らう気だ。静かだが、殺気が蠢いているのを感じる。真夜中の密林の爪牙。炎の飛び交う戦場の照準。どれとも似つかない、生無き殺気。しかしこんな得体のしれないところで、意識のあるヒトの身体を失うわけにはいかない。下唇を強く噛み締めて、今にも融解を起こしそうな頭を抱え、必死に頭痛に耐えた。

…記憶の目覚めは、まるで星が生まれる時のような、まばゆい輝きの中で始まった。感情が息を吹き返し、身体が震える。怒りや悲

しみ、すべての感情が光の中心からほとばしり、煌めきながら漆黒の中を吹き荒れた。噴き出した感情と記憶の光の奔流が、身体の中へと次々に入り込む。心臓の拍動が勢いを増し、破裂寸前の状態だ。喉の奥から叫びが込み上がってくるのを感じる。

駄目だ…！ 口を開けるな…！

咽喉を焼きながら叫びを飲み込むと、途端に目から涙が零れ落ちた。それは、激痛や込み上がる吐き気のせいではなかった。胸の中心の辺りから、何か強い意志が眼を刺激してくるのだ。涙は止まらなかった。辛い訳ではない。痛みが苦しい訳でも、自分のこの境遇に悲しんでいる訳でもなかった。ただ、その想いはなだれ込む感情の奔流よりも、強い意志を持っていた。そしてついに、口を開いてしまった。

「……。恵^{エア}亜」

その刹那、強力な引力に捕縛されたかのように、身体が空間を切り裂きながら急降下を始めた。落下速度はみるみるうちに増していく。自分の身体を取り巻いていた光の輝きが強くなる。光速に追いついたのか、ついに光が帯をなすような速度に達した。その速さに耐えきれなくなったのだろう。身体が粒子化を始めた。指先が溶けるように消えていく。痛みもなければ出血もなく、無音の空間へと、身体の端から消え溶けていく。疲弊しきった右手を鞭打って、身体とともに急降下してきた血まみれの手袋を確りと握らせた。どこからともなく溢れてくる、離してはいけないという意志がそうさせた。そしてそのまま、闇の中を零れ落ちる光の流れに飲み込まれ、やがて溶けて同化してしまった。

パズルのピースを嵌めるように、記憶の断片が一つ、また一つと繋がっていく。

繋げ、紡ぎ、追憶する。

人の脳は必ずしも、生きて死ぬまでを全て記憶しているわけではない。

また、今ここで思い返すことは、事実であり真実ではないかもしれない。

もしかすると事実ではなく、単に想像かもしれない。

そして自分が『誰』なのかすらわからない今、それが『誰』の記憶なのかすらわからない。

だが間違いなく、これは『俺』の記憶だった。

―バベル

音の響き、文字、感覚…。記憶として刻印された、最も強い言葉。この言葉は、まるで鍵のように、散らばり閉じきった記憶の断片を解錠していく。

解錠され自由となった記憶の断片が、再び元の形を取り戻す。

俺は手を伸ばし、それに触れた。

有形無形にかかわらず、俺はそれに触れたかった。

俺が『俺』である証。『俺』の記憶。

触れると、それは俺の身体へと入っていった。

…そして思い出す。

―全てを。

「恵亜」

名を呼ばれる。返事をする気もなければ、声の主の方を向く気もなかった。

「君のやりたいことは分かっている。でも、何度も言った筈だ。…後悔は免れないよ」

背の高い建造物に囲まれ、周囲は陰り薄暗かった。しかし、日差し
の照りつける大通りから少し外れたこの広場は、涼を求めるには
格好の場所だ。広場の真ん中には大きな樹が立っていた。衛生管理
上、舗装整備され、地肌を露出させる場所が何処にもない現在、こ
の樹の存在は人々にとって特別だった。

…そして、他ならぬこの私にとってもかけがえのない存在だ。

「君にとって彼が特別なのは分かる。でも、だからこそ…」

私は振り返り、優しく諭してくれる彼の言葉を制し、はつきりと
言った。

「知りたいんです。彼が何を思い、何をしたのかを、全部」

これは懇願ではなく、『意志』だった。そして、今度こそ懇願す
る。

「アウユキ 淡雪さん。お願いします。会わせてください」

心の底から、その想いは全身を駆け巡り、自分の行動を支配していた。

知りたい。

何より、会いたい。

頭を下げてみると、ふと淡雪の影が動くのが見えた。顔を上げると、彼は笑っていた。

「…判ったよ。きっとこうなるんだろうと思ってたさ」

淡雪はそういうと、広場の中央の樹に向かって歩き出した。承諾が下りたことに安堵し、自分も広場の樹を振り仰ぐ。再び此处を仰いだ時、私は何を思い、何を感じているのだろう。少し未来の自分に思いを馳せながら、淡雪の後を追う。

「樹に両手を当てるんだ」

樹の傍に着くと、淡雪はそう指示した。言われた通りにすると、彼は懐から乳白色半透明で卵にも似た『石』を取り出し、私と樹の間に置いた。

「『^{アルケミア}精錬石』を媒体にして、彼と君の『ソフィア』を混同する。…

もう一度言うけど、この方法で帰着した精神記憶は、多くの場合元の人間に悪影響をもたらす。例えば、片方の『ソフィア』が不完全である場合だ。彼の『ソフィア』の再構築が不完全だった時、彼の精神空間を垣間見ることはできても、自分自身の『ソフィア』が飽和して精神障害を引き起こす。そうなってしまったら、君は今までどおりに物事を考えられなくなってしまうだろう」

淡雪はここで言葉を切り、私を見上げた。彼の目は慈愛の色をしていたが、その顔はどこか寂しげだった。『ソフィア』…。嘗ては

『知の集合』といわれていた。知識、技術、記憶、性格、そして感情。人の『精神』と呼ばれるものが分析可能となつて久しく、それはいつしか『ソフィア』という名を冠して人々に認知されていた。色のスペクトルも波長もたない『ソフィア』は、身体を流れる血流と同じように、身体を廻っている。四肢・五臓六腑から、神経伝達物質、血液、細胞の構成物に至るまで、あらゆる箇所潜在し、生命が尽きるまで『ソフィア』は人の身体を廻っている。私にも。淡雪さんにも。…彼にも。

「…感情だつて、変わるかもしれない。そして、今回はその可能性を十分に有している。…本当に、いいんだね？」

『ソフィア』はその人そのもの。それ以上でも以下でもない。私のソフィアが乱れれば、私は『私』ではなくなる。完全なものとは完全なものの融合は、原型をとどめず不完全な混同物となるだろう。

「私は…、知ることさえできればそれでいいんです。…お気遣いありがとうございます」

本心からのお礼にもかかわらず、淡雪の表情は依然として固いまだ。

「…言つたよね。これは彼の本望じゃないんだ。…僕は、忠告したからね」

淡雪は本気で、私を気遣つてくれている。そして何より、彼の本意を汲んでくれている事が嬉しかった。それだけに申し訳ない気持ちで胸が苦しいが、可能性がなくなってしまう前に、それに賭けてみたいという気持ちのほうが勝っていた。

淡雪の親切に首肯で応えたと、彼も心を決めたのか、両手を『石』

の上に重ねて載せた。

「じゃあ、始めるよ。彼の事を一心に想うんだ。君がすべき事はそれだけ。いいね？」

二度目の首肯。

私が集中すると同時に、足もとで淡雪の手が仄かに白く明るくなつた。

感じる。

手の平、腕、肩、首、そして胸、腹…と、何かが流れ込んでくるのがわかる。

そして気づく。

言葉では言い表せない温もりが、全身を走っている。

これは、彼だ。『彼』なんだ。

全身を廻る速度が速くなり、『ソフィア』の流動は熱を帯びた。次第に視界が白け、何も見えなくなる。意識が遠くなるのを感じる。

しかし、意志だけは保ち続けていた。

知りたい。

あなたの見たもの。聞いたもの。感じたもの。会いたい。

あなたの記憶に。想いに。あなた自身に。会える。

きつと会える。

…会ってみせる。

必ず。

序章

記憶（後書き）

私の処女作となる作品です。描写、語彙、センスもろもろ未熟なところではありますが、どうか未永く（？）お付き合い戴けたら幸いです。また、投稿ペースは徐々に遅くなることが予想されますのでご了承くださいorz

それでは引き続き『BABE L』をお楽しみください！

また、この物語はフィクションですので、実在の人物・団体・事件・その他物語とは一切関係ありませんよ。

第一章（一） 繫縛

第一章

（一） 繫縛

一人の男が溜め息をついた。そこは人の行き交う大通りを少し外れた、涼しげな影に満ちた路地にある小さな喫茶店だった。寂れたというよりはむしろ小綺麗な店内は、細い脚をした机と椅子が無造作に並べられていて、どの机の上にも小さな花瓶と小さな白い花がこれに差してあった。店内の壁には撥条式ぜんまいのアナログ時計が掛けられており、殺風景な壁を唯一彩るものとしての存在感があった。溜め息男はカウンターに座っていた。肩を落とし、見るからに意気消沈している彼を氣にかけてか、店の主人が優しく笑みを浮かべながら声をかけた。

「アイスコーヒー、もう一杯いかがですか？」

店の主人はそういうと、空のグラスに冷たいアイスコーヒーを注ぎ、カウンターに突っ伏している男の横に置いた。疲れを見せながらも彼は穏やかに微笑んだ。

「ありがとう」

「お代は要りません。鼻屑にでもらっているお礼です」

店主は笑顔でそう言つと、別のグラスと布を手にとり、慣れた手つきでグラスを磨き始めた。男は恵まれた黒褐色の水で喉を潤すと、独り言のように呟いた。

「…ここは平和だな」

男は手に持ったグラスを置いた。中に積まれた氷が滑らかな音をたてる。少しの間をおいて、男の独り言に店主が言葉を返した。

「あなたがそう仰るのなら、多分そうなのかもしれませんな」

「…相変わらず食えない言い方するな、あんた」

「あなたもお変わりないようですね」

店主は手を止め、男を見やった。

痩せて弱々しい印象の輪郭。白に黒が混じったような長い頭髪。凝った装飾が施された勲章だか紋章だかを偉そうに付けた上着は、擦れて皺が目立っていて品位を失っていた。歳若いはずだが、その肌色もどこか褪せており、年季さえ感じられた。しかし、そんな男に有無を言わせない威圧感を与えているのは、その隻眼の顔だろう。左眼に縦に入った生々しい裂傷の跡が、男の過去を謎めいたものにさせるには丁度いい風格を醸していた。その上男は片目を失っているとしても、開かれた鋭い漆黒の瞳に込められた光は生氣に満ちていた。

男は店主の視線を受け流すかのように、自分の視線を店の外に泳がせた。

「最近暑くてね。しばらくだったもんで用事のついでに寄ったんだ」

聞かれてもいない問いに応えた隻眼の男は、視線を窓の外から店内に移して言った。

「あんたも…、変わらず陰気臭いね」

「なにぶん陽が当たらないもんで」

店主の応えに、男は顔を振り向けた。黒い瞳の焦点は店主の顔、そして磨かれたグラスへと移った。

「“陽”、か…」

男は溜め息を殺すかのようにそう呟いた。こざっぱりした店内に静寂が満ちる。グラスの氷がたてる涼やかな音が、一層静けさを際立たせていた。男はおもむろに上着の内ポケットから銀製の懐中時計を取り出し、時間を確かめるような所作をした。

「お戻りになられなくても宜しいのですか」

「…言っただろう。用事は済んだって」

店主が言うと、男は然も当然といったように返答した。男が再びカウンターに突っ伏して寝に入るのを見届けながら、店主は肩を竦めた。

「しかし、あなたが居ないとすると、あそこは今頃天国でしような」

店主の言葉に、男は口の端を僅かに釣り上げてにやけた。

「…そうでもないさ。今頃は鼠の駆除で生き地獄だろう」

「鼠、ですか」

「そう、鼠」

アナログの時計の時を刻む音が規則的に響いている店内に、微かな空気の揺らぎが生じた。溜め息男が席から立ち上がったのだ。

「ごちそうさん。また来るよ」

「毎度ありがとうございます」

店のドアが閉まり、また少し静寂の濃くなった店内で、店主は男の姿を目で追っていた。そして静かに懷から何かを取り出し、それを握りしめながら彼は小さく呟いた。

「目標、移動」
ムーヴ

言い終えるのとほぼ同時に、握りしめた指の間から僅かな光が漏れた。彼はそれを確認すると、握っていたものを懷に戻し、再びグラスを磨き始めた。

強く光の射さない涼しげな路地を抜け、再び大通りに戻ってきた。全方位から反射熱を浴び、突然の刺激で汗腺が一気に開くのを感じる。リクルートスーツに身を包んだ人々がお互いに身体を擦り合わせながら道の上を流れ歩いている。その流れに、自分も身を投じた。軀の五感が、氾濫する情報を手当たり次第に捉え始める。鳴り響くクラクション、内容の掴めない会話の雑多、冷淡で光のない双眸を運ぶ人々の足音……。ありとあらゆる音源が乱れ合い、喧騒となって人々の間を縫うように蔓延^{はびこ}っている。さながら水の分子の鬨^{せめ}ぎ合いに巻き込まれているようだ。ただでさえ摩耗の激しい上物である筈の上着に、さらなる摩擦が加わる。そのうち火でも起こるのではないだろうか。誰かに足を踏まれた。怒鳴る気持ちさえも起きず、そもそも後ろから押し寄せる人の流れの所為でそんな余裕もなかった。

人混みの中に『表情』は無かった。

喜び、怒り、憂い、笑い、…疲労さえも。

人々がお互いに交わす言葉は二言三言。無駄な台詞はひとつとて

無い。無駄のない行動の数々が、恐ろしく奇妙に思える。しかし、そういう思いに駆られるのは恐らく、この界限では俺だけだろう。人のような行動をし、人のそのような言語を操り、日々を闊歩する彼らは、もはや『人』ではなかった。

…日常としてありふれている喧騒の中で人々はただひたすらに寡黙であり、無感情であり、冷徹であった。機械のように手足を動かし、合理的かつ簡潔な言葉を喋り、人にとって理想的な活動のできる時間配分の中で課せられた事柄を規則的に遂行する。いかなることに感情を用いない。いかなることに私利私欲は認められない。自我・欲求^{エゴ}を完全無力化した超自我の領域の中だけが、生きる人に赦された唯一の居場所。それがこの町…いや、世界の秩序と化していた。

人の流れの中から顔を上げ、遙か先の方へと目を向けた。幾重にも重なる階層道路の間から、天空を突き抜けるように聳える巨塔が見える。地上付近は塔にしがみつくように密集している建物で一つの岳と化しているが、その頂きからは蒼い空に向かってただ真つ直ぐにそれは延びていた。人々はその巨塔を、畏敬の念を込めて「^{バベル}地の穴蔵」と呼ぶ。同一言語が生み出す民^{ヒト}の強力な結束と能力を恐れた神が、言葉を攪乱させることによって阻止したと謂われる「バベルの塔」。嘗ては神と等しくなろうとする人間の罪を戒めた物語であった。今、遙か先で陽炎となっている巨塔は、ただの屋気楼ではなく嘘偽りのない実体である。

バベルは人間の誇る知識、思想、技術、歴史、全てを賭して生み出された、一つの終着点であり、総本山である。学術機関、政治機能、経済市場、通信・メディア、保健衛生機関、福祉厚生機関、食糧管理機能、教育機関、住居機能…。一つの国が抱える組織の全てを内蔵し、絶対的な統率性を有しているという事実が、あの巨塔が世界の中心とまで言われる由縁だ。ありとあらゆる事象を律し、秩序と平和をもたらす組織を内包したあの塔は、今となっては神をも

凌駕する存在なのかも知れない。

そして、人が人である証を全て奪い去ったのも、あの塔であつた。

感情、自己^{エゴ}、人が人である以上抱き続ける欲情でさえも、バベルは奪い取り掌握している。万人の思考判断を管理するという、神懸りな技術をあの巨塔は秘めているというのだ。人を掌管できる以上理想を具現化させることは容易だ。バベルはその術を持っている。：俺はそれを知りたかつた。一つ芽生えただけだつた小さな好奇心と疑問が、いつしか疑心暗鬼を生み、今となつては全てを疑いだしている。一体誰がこの秩序を創造したのか。その術は一体何なのか。人を人でないものにした原因は何にあるのか。全てを封縛し操ることを可能にする技術は存在するのか。

人は神に到達し得るのか。

絶対に恒久的な平和は、誰しもが望む理想だ。だからこそ人は団結し、祈り、想像し、創造する。しかしそれは単なる「理想」に過ぎないのであつて、現実には存在しない。永遠なる平和が約束されたとき、果たしてそれを信じる事が出来ようか？ 謀略や詐欺が潜んでいないと、誰が断言できようか？

だが現に今、そのひとつの答えを見せつけられている。縋るように人々は集い、バベルの手中へと収まつた。猜疑心を抑えきれなかつた俺は、そう、取り残されたのだ。社会に、人に、バベルに、除外されてしまった。：もう後戻りはできない。疑うことでしかあの巨塔に対峙することができないという悔恨に苛まれようと、立ち続けなければいけない。人が人でない世界で、果たして人は平和かそれがまやかしかだと証明するために、この町の真実を知るために。

言語を乱された人間は世界に散つた。そして人はまた、統一さ

れつつあった。

——「無感情」という言葉で。

(二) 逃避

(一) 逃避

人の流れの中を掻き分けつつ、前へ進む。次第に流れが穏やかになり、視界が開けてくる。濁流でもがいたあとの身体は疲労困憊していたが、歩を止めることはできなかった。

…追^{バベル}手とはな。俺も、有名になったもんだ。

人の奔流の対岸から、一人流れに逆らって向かってくる姿を視認したのだ。この町で不合理、非効率な行動をとるやつは、俺か、さでは同志か、またはバベルか、しかない。バベルの敷く感情の掌握による人の統制には、昔は賛否両論あった。今となつては無感情統制が成立しているが、実際には抵抗し続けている人々もいる。俗に彼らを『反乱因子^{レジスタンス}』と呼んでバベルは彼らを懐柔、または駆逐しようと躍起になっている。俺も当然、その対象のうちの一人となる。

檻^{ほろ}裡になりつつあるコートを気遣う余裕もなく、いよいよ人通りのなくなつた狭い路地を全力疾走する。バベルの城下町というだけあつて、暗く陰気な路地にも衛生管理が行き届いていて、清潔感さえ感じられる。颯爽と走りぬけるどの路地でも、砂塵が舞い上がるのだ、異臭がたちこめるなどの不快がない。猥雑や低俗といったものが入り浸っているような路地である筈が、寧ろ啓蒙的な雰囲気醸し出している。…逆に言えば、あの巨塔の眼がこんな微部にまで及んでいるということだ。

追手はどうやら一人のようだ。奴が人気のない路地で、疾駆しながら気配を消すなどという芸当さえ持ち合わせていなければ、そう考えても間違いないだろう。葉脈のように散在する路地を縫うよ

うに走り抜け、目的地へ急ぐ。追っ手との距離は幸い縮んではないが、開いてもいない。視界に入らない距離で路地に入っているつもりだが、行動を予測できるのか、どう複雑なルートを選択しても追っ手の追従から逃れることができない。

…機械人間風情が。

思わず舌打ちする。今俺を追っている人間も、バベルの齎もたらした疑似平和に勾引かどわかされた一人なのだろうか。惑わされたのが最期、自己コを抜き取られ、機械仕掛けの塔の一部品と化した哀れ達の一人。日常を継続している人もいれば、奴のように配下の手先として扱われる人も存在するのか。さしずめ平和維持活動という名の闖入者ちんにゅうしゃ駆除というところだろう。平和を乱そうとする者はどの世界でも疎とまれるのが一般常識の一条だ。だが、どんな敵対勢力を相手にする時でも、武力行使は最終手段と相場は決まっている。どうやら、奴らは想像以上に短気であるようだ。

入り組んだ路地を蛇行し、迂回しながらも、目的地へとたどり着く。そこは純白の壁を大仰に設えた建物の裏口だった。追っ手を横目で気にしながら、手指をコートの袖口で拭い、扉の個人認証システムに親指を押しつける。途端、システム音が薄暗い路地の静寂を乱す。

『接触反応アリ。個人認証開始。指紋照合開始。……ERROR。静脈認証システムへト移行。静脈照合開始。……オールブルー。認証完了』

扉のロックが外れたのを確認し、滑るように建物の中へ。

駆逐対象という身分のため、バベルを詮索するためには安全な拠点が不可欠だった。ここはその内の一つだ。『食糧監査選別施設』。

それがこの名称だ。民に供給される食用品の全てが、生産された後に一度ここへと集約される。その後安全性、栄養価値、嗜好性など様々なソースによる検査にかけられ、基準段階的にランク付けされる。時期、地域、文化圏ごとに変動する需要レートに合わせて、それぞれに対応したランクの食糧が選別、供給される。この施設は、その食糧供給システムの中核であった。民の生命の源を管理する施設だけに、この守殻は堅牢だ。扉は一つしかなく、指紋、静脈、網膜等の個人照合システムが扉と建物内のあちこちに配置されているため、一般市民の侵入はおろか、バベルの重役でさえ承認されなければ門前払いとなる。さらに建物自体も強力な防御壁を備えており、銃火器類を用いても侵入は不可能だ。人々は、万が一にも明日の食の有無で心配をする事はない。この城塞の内側にさえいれば、まず安否は保障されている。それはしがない反乱者にも同じ事だった。しかしもう、ここでの長居は無用だ。他の場所に拠点を構えるほかない。

施設の中心へと続く長い通路を駆け抜けながら、背後の気配を探る。人の気配は既に消えていた。扉のセキュリティに阻まれ、見失ったのだろう。

しかし、扉の入出記録と認証盤に残った痕跡で、今ここにいることを直に知られてしまうことは確実だ。ならば姿を眩くらます他ない。

人二人がすれ違えるかどうかという狭い通路を、誘導灯を頼りに突き進む。何度か右へ左へと向きを替えたものの、基本は一本道だった。搬送作業が昼夜絶えず続けられているにも関わらず、施設内は不気味な静寂が漂っていた。暫くして道が一気に広がり、施設内の人為管理室へと隣接する踊場へと足を踏み入れる。人為管理室は広大な施設の中で唯一人が自ら行動し、管理を行う箇所だ。いくら最先端の機械と超機能演算機に任せた全自動式のシステムと言えども、不祥事は起こる。人による監視の目も時に必要だ。―例えば、幾重にも張り巡らされたセキュリティをもともしない侵入者が出現した時、というような。

管理室のロックを外し、室内へ滑り込む。無音が満ちる空間で唯一人、荒くなつた息でそれをうち破る。部屋の中央には、操作盤とモニターに囲まれたデスクと座席。そこに白衣を羽織つた男が、気怠そうにモニターを仰ぎ見ながら座っていた。

「ザンゲッ残月。ここはもう危ない。移ろう」

男に向かつて勧告する。残月は座席からこちらを振り返つた。頭を包み込むような艶のある黒髪、鼻が高く整つた顔立ちをしている彼は、土臭い風貌の俺からしてみれば名のない美術品のような美しさを備えていた。

「…一体何やらかしたんですか」

残月は表情一つ変えずに問うてきた。躊躇いもなくものを言うやつは、俺の周りでは後にも先にもこいつだけだ。

「バベルに見つかった」

「…。それで、『石』は？」

懷をまさぐり、こいつが意図する物を突き出す。

「盗つてきた」

「それを見られたんですか？」

「いや、その時はいつも通りだ」

「そうですか…」

残月は乳白色半透明の丸石を受け取り懷に収めると、顎を掻き始めた。コイツが思案する時にする癖だ。

バベルに抗うことを決心し集った同志たち——『反乱因子』^{レジスタンス}。

こいつもまたその一人だ。バベルとレジスタンスの抗争は今に始まったことではない。俺が知り得る限りでは、バベルが建設された当初からその諍い^{いさか}は続いていると言われている。バベルの敷く無感情統制は今でこそ非人道的だが、昔はまだ緩やかな統制組織であつたという。しかし『ある日』を境に、バベルは変貌した。まるで内側から悪魔が湧いたようだったと、年のいった婆さんが言っていたのを思い出す。人々は掻き乱され、蹂躪され、掌握された。幸運を掴み取った俺らには、平和を歪ませた原因であるバベルに巢食う悪魔を探し出し、取り除く義務がある。…それは、再び自由を得ることへの抱負でもあつた。

顔を上げ管理室内を一瞥した残月が、口を開いた。

「…此処^{ここ}はもう駄目ですね」

「それは先刻^{さき}言っただろ」

「そういう意味じゃありません」

「は？　じゃどういふ…」

「時間がありません。次の拠点まで案内します」

モニターを自動へ切り替えた残月は、脇をすり抜けて管理室を出て行った。珍しく判然としない態度が腹立たしい。…いや、常に癪に障る言い方はするが、この状況で焦らされる羽目になるとは思いもしなかった。殴りつけたい衝動を抑え、その後を追った。

(三) 地下 - ? -

(三) 地下 - ? -

「首尾の方はどうなんですか？」

施設を後にし、向かいに建つ高層ビルの地下通路を走り抜けながら、残月は問いかけてきた。食糧監査選別施設を始め、バベルの抱える重要な機関は町のいたるところに点在し、各々堅牢なセキュリティが設けられている。そのシステムを巨塔に集約・接続しているのがこれら『連絡棟』と呼ばれる高層ビルだ。ビルといっても昔のように様々な企業が事務所を構えているようなものではなく、つて、とても常人には理解できない規模の演算機が配備されているらしい。もつとも、バベルの誇る監視システムの所為でその実体は掴めていないのが実情ではあるが。

「…いつも通りだ、と先刻言^{さっき}つただろ」

どうもこいつに主導権を握られるのは気に入らない。それ以前に、性に合わない。性格も行動も口調も何もかも。レジスタンスとしてバベルの膝元で行動できるのは有り難いが、せめてこの冷徹野郎から距離を置きたいと感じてしまふ。そんな心中だから、意図せずしてぶつきらばうに返答しているのが自分でも判った。

「具体的にお願いします。次の局面に移行するかどうかの判断ができません」

息を乱すことなく、残月は淡々と言葉を並べた。こいつはバベルに感情を奪われた訳でもないのに、この冷淡さだ。まるで機械のよ

うに任務を全うし、人の感情を弄ぶように棘のある言葉を突きつける。そんな奴に手駒扱いにされている自分が情けないが、これも同志たちのためだ。

「中心街方面の動力源はおさえた。今頃は鼠の処理で大騒ぎだろうよ」

「…鼠、ですか」

「そう。鼠」

通路が交差している場所に近づき、減速した。残月が仄暗い電灯の下で両側を警戒するなか、どこかでしたような会話をする。残月は懷から先ほど渡した『石』を取り出し、枝分かれする通路のそれぞれに掲げている。

「…肝心の動力源に危害は—」

「ねえよ」

残月の言葉がこちらに届ききる前に言い返す。いい加減こちらの機嫌を窺ったのか、そうですか、と一言言つとそのまま口を開かず進みだした。

バベルを中心に据え、それを取り囲むように重要施設や連絡棟、住居棟等が環状に立ち並んだこの町の構造には理由がある。レジスタンスとして暗躍し、闇に葬られたこの町の、この世界の過去を知らなければ、きっとこの歪んだ平和の中で安穩と暮らしていたことだろう。

温室育ちには到底たどり着けないであろうこの真実は、とても面白いと言える代物ではなかった。

そう遠くない昔、幾度も論議が交わされようとも留まることを知

らない人と人の闘争は、最終的に世界へと飛び火した。凄惨な戦は二度と起こさないと誓い合ったとしても、人は所詮『人』だった。人は自己を守るために正義を振りかざし、人の命を奪う傍らで平和を謳った。そして最終的に決して使われてはいけなかったモノが、各地で爆煙をあげ、地球は焦土と化した。死の雨が地上に降り注ぎ、文字通り地上は荒廃した。

地下へ逃げ延びた人々は、幾度も経験した失敗を三度も繰り返した事に茫然とするのみだった。

しかし、人はある『石』を手に入れてから、再び平和への希望を見出し始めた。

- 精錬石

人の感情に呼応し、さまざまな現象、化学変化等を引き起こす未知の物質。

新たな発見は無尽蔵の可能性を秘めており、人々はこの不可思議な性質をもった物質の解析に全精力と多大な資金を費やした。

化学で証明できない性質をもつこの物質を解き明かしたのは、精神分析や心理学といった分野だった。

そして見つけ出された、精錬石が様々な現象を引き起こす励起状態になるきっかけを与えるもの。

それは、他ならぬ人の体の中にあつた。科学者たちはそれを知の集合、『ソフィア』と名付けた。ソフィアは人の精神そのものである、何処のだれにも同じように潜在している、人を人らしく形作るものの根源だった。また、ソフィアと精錬石の研究にはあらゆる分野の連携が不可欠だった。人の知と技を結集して挑むこの研究に携わる人々は、化学の発展を齎した人々にちなんで『錬金術師』と呼ばれるようになる。そして精錬石が実用化、普及と遂げた現在、精錬石を自在に操る人の事を錬金術師と呼ぶようになったという。

バベルは聡明な錬金術師達が作り上げた平和の礎であり、それを

実現させるべく、この町は作られた。町が環状なのは、巨塔を中心にその規模を広げていったからだ。

地下に造られた『地上へと延びる塔』。故に天地の穴蔵^{バベル}。その塔の抱える町のそのまた地下で、俺らは影のごとく生き延びるしかなかった。

「…ここです」

残月が緩やかな曲線を描いて延びる通路の途中で突然足を止めた。あまりにも急だったため、危うく追い越しそうになる。

「ここは…、どのへんだ？」

地下通路はもともと、町が出来上がる以前、地下シエルターとして機能していたときのいわば入植地跡だ。バベルはこんな閉鎖的で不合理な造りの空間に利用価値を見出すはずもなく、ともすれば道標となる物など無い。さらに、残月がこのあたりだと言って止まったこの一帯には、扉もなければ鼠穴さえもなかった。

「ここは空調管理制御施設の真下です。陽楽^{ヨウラク}さん、あなたの管轄区じゃないですか」

知っている筈だとも言うように、残月は俺を見据えた。瞳の漆黒が今にも噛みついてきそうな錯覚を覚える。

「俺は施設内の偵察を任されてた。生憎、地下の構造についてはからっきしだ」

言い訳染みた台詞を吐いた事に恥を感じ、青年の眼差しから顔を背ける。残月は無言で石質の壁に寄りかかると、再び石を取り出し壁に触れさせた。…と次の瞬間には、そこに先程通ってきた通路と同じような通路が現れていた。

「…お前、何を―」

「話してる時分ではありません。…追跡されています」

なんだって…？

言われるまでその気配に気付けなかった自分に嫌悪感が走る。先刻の追手と同じ気配が、闇に埋もれた通路の奥から近づいて来るのが分かる。反響する足音は増幅され、人数が把握できない。

「陽楽さん、急いで」

残月は既に隠された通路の方へと駆け出していた。後を追いつて返って敵を確認する。…しかし、己の目の焦点は袋小路と化した通路の突き当たりだった。壁に擬態した通路は、俺らが通り抜ける瞬間に元に戻ったようだ。

「…撒いた、か」

振り返り立ち止まっている残月に走り寄ると、そう呟くのが聞こえた。自分も再び振り返る。

…気配はない。気付かず通り過ぎたのだろうか。

緊張が緩み、強張った肩が降りるのが判った。いつになく、今日はバベルのプレッシャーが強い。しかし、自分の犯した事を思えばそれは至極当然のようにも思えた。

「潜入による情報収集は困難を極めそうですね」

こいつも、珍しく本気で息を荒げていた。

「あなたの放った鼠の所為でない事を祈ってますよ」

「…なんだ、溝鼠トブネズミの礼拝ミサにでも行ってきたのか」

「ええ。…低脳で無慈悲な上官に捕らわれた挙げ句、儚い命を散らした鼠達のために」

皮肉を皮肉で返され、気分が悪くなった末に舌打ちする。

—空調管理制御施設でその管理職員に扮し、動力源である『精錬石』の監視及び奪取を行う。それが地下で身を密めていた俺に、残月が与えた指令だった。最初は、重要拠点での密偵工作と聞いて耳を疑った。…そんな事が可能なのかと。

レジスタンス側は用意周到だった。街中に点在する重要拠点全てに、同時に密偵を潜り込ませるような手筈を整えていたのだ。俺はその最後の一人に抜粋されたという事であった。

バベルに刃向かい、地下迷宮へと追い込められた連中は数え切れない程居る。その中にはバベル建設に関わった重役や下働きの人々も含まれていた。しかし彼らではなく俺が選ばれた。何故俺なのかと一度残月に問うた事があった。

『精錬石の扱いなら、バベルから逃げ出してきた技術者の方が上だろう。どうして俺なんだ』

『現在のバベルからの脱落者はいません。あなたの言う技術者達はそれ以前に計画に反対し、追放処分を受けた人達です。彼らの経験、技術は残念ながら充てにならないでしょう』

『だから何故俺なんだ』

『あなたがその抵抗運動の一味であり、かつバベルに「重傷」を負わされた。これが理由です』

暴力による片目の欠落。これが精錬石の性質発現を助長する材料になりうると残月は言った。原理を理解する気は毛頭ないが、煤汚れた俺にも『錬金術』の才が眠っているのかもしれない。諸事情を加味した結果密偵に抜擢された俺の派遣先が、『空調管理制御施設』と呼ばれる、地下コロニー内の気温、湿度等の管理および制御を行う施設だった。地上で行われていた大気の循環は、地殻に閉ざされた現在の世界にはない。生物の生命活動を維持するためには、恒久性のある有機、無機物の生産消費のサイクルは欠かせない。その地上時代の円環の一点を担うのがこの施設だ。それだけ大仰な目的のために機能しているだけに、食糧監査選別施設に比肩する警備体制が敷かれている。

潜入員は俺を含め三名。そのうちの一人にこの施設の構造に詳しい人物がいた。彼が言うにはセキュリティが仕込まれている入口はひとつのみであり、基本的に内外での人間の行き来はないという。感情を抜かれ、怠慢や虚脱感が生まれない人間による二十四時間の監視体制のため、人員の調整が不要なのだ。これは他の重要施設も同様で、すなわち施設内の職員を把握、制圧できれば、そのままこちらの手中に墜ちる。こんな都合のいい算段がバベルに通用するのか甚だ疑問だったが、限られた情報と人員、技術を統合して考えると、最早継ることのできる策はこれ以外見当たらなかった。

入念な情報収集を繰り返し、行動を起こす局面となった。

施設を詳細に知る彼一人がまず扉の認証システムを破り、内側から残る二人を招き入れるためシステムを改竄する。合流しシステムを復元した後に、施設内の職員の動向を把握。ここまでで数十分。しかし、彼らの意思疎通が精錬石を介されて行われているという事に気付くのが遅すぎた。身柄を拘束したのはいいが、恐らくバベルに伝わったのだらう、精錬石の確保を終えた直後に施設内に応援が駆けつけたのだ。

…俺は、この施設に居た人々を、精錬石による束縛から解放した。

いや、してしまった。何千何万とある各種機能に対応して機能している石のなかから、人同士の情報交換を司るものを奪ってしまったのだ。自我を取り戻した職員達はその時点で、バベルに『^{レジスタンス}反乱因子』として認識された。そして図らずとも、俺らは彼らを囷にし施設を後にしたのだった。

空調管理制御施設への潜入は、この日を境に不可能となった。認証コードが書き換えられ、レジスタンス側が知りうるバベルが抱える人間の個人IDが使用できなくなったのだ。潜入箇所を食糧監査選別施設へと移した俺らは、残月の指揮の下、現在の作戦に従事している。

残月は空調施設での一件を快く思っておらず、現在の作戦はより慎重に細心の注意を費やして進められていた。しかし、それが打ち碎かれた今、残月は焦燥に駆られているのだろう。白く冷やかかな肌色はより冷たく、夜の静寂^{しじま}を思わせるかのように重く沈んでいた。

(四) 地下 - ? -

(四) 地下 - ? -

立ち込める臭気、覆い尽くす闇、逃げ場を失い何度も跳ね返る足音。延々と伸びる地下通路は、分岐することなくただ一直線に続いていた。足元を等間隔で照らす橙色の誘導灯が、俺と残月の影を不気味に作り出している。残月のそれは線が細く、からだ軀の繊細な動きを忠実に模倣している。光を受けた残月を蔑むかのように。主君を虚こ仮にする家臣のように。軀にはソフィアが宿るが、光により生み出された影には宿らない。しかし、まるで鏡像の如く正確にそれは蠢く。ソフィアを与えられることなく生み出された単なる『物質』に過ぎないのに、それは躍動し、地を、壁を、天井を這う。光というモノが現れることで、必然として生まれる闇。それが影。光が点れば、そこには影が生まれる。巨大な存在であればあるほど、影は延び、深くなる。しかし闇から光が生まれることはない。闇に溺れれば、光を与えられるまで二度と抜け出すことはできない。この不可逆を打ち破るのに、俺らはどれだけの犠牲を伴うのだろうか。どれだけの闇を越えればたどり着けるのだろうか。一度光を奪われ、絶望の闇に苦しんだ時代を越え、人々は再び光を取り戻した。願わくは、それが万人に降り注ぐ陽光でありますようにと。しかし、やはり影は生まれてしまった。平和の意味を歪ませ、地下世界には偏光が満ちた。俺らは、正さなくてはいけない。人が人たる存在で、平和の中を過ごせるように。

電力供給範囲が限界なのか、それとも既に供給を絶たれているの

か、進むにつれて誘導灯の明かりが微かになってゆく。この通路は、一体何が目的なのだろう。居住区跡というには聊か不気味すぎではないか。地上を追われ満身創痍の人々が、心身を預けられるような場所とは思えない。バベルを中心に居住区は八方位に築かれている。ここは真南区しんなん。文字通り真南に位置する居住区である。記憶の限りでは、この状況は他の居住区には見受けられない異常なものであることは間違いない。

「この通路、何処へ繋がってるんだ？」

「レジスタンス本部です。お招きするのは初めてですね」

「そうだな」

「おそらく、レジスタンスが本格的に活動してから部外者が訪れるのはこれが初めてです。情報漏洩を防ぐのが目的ですが、まあ、あなたなら心配は無用でしょう」

「そりやどうも」

レジスタンス本部……。地下都市の暗部、そして真の姿の根源。人が人らしく暮らすには、人ならざる人から逃げ隠れて身を寄せ合うしかない。八つに分散した居住区に彼らは集約され、バベルの監視の目から隠れ忍んでいる。力の無い女子供や老人、その他の甲斐性なしは残存している居住区で息を潜めているが、理想を掲げバベルと戦う意志を示す者達は、『反乱者レジスタ』として活動している。

「…真南区のレジスタンス本部は、バベルに取り残され隠れて暮らす人々の郷里です」

お互い表情が読み取れないほどの暗闇のなか残月の呟いた言葉には、普段備わっている警戒心や、緊張感はなかった。静かな笑みを浮かべているかのようにさえ思えた。

本当に『感情』がなければ、そんな表情は表れない。考えてみれ

ば、こいつもソフィアを奪われることに抗った一人なのだ。ソフィアが通っていないければ、それは人ではない。指示、命令、合理的判断による簡潔な目的…、それらに左右されて生きるヒトは、人ではない。不器用なりに、レジスタンスを想いやっているのだろう。淡泊で無味乾燥な付き合いだが、随所に表れる他人の人らしさが、自分の心の慰めになっていた。

「食糧監査で低ランクに指定された物資が廃棄される場所にそれはあります」

「…となると、食糧についての心配はなさそうだな」

「ええ。しかし、来るべき人口増加を考えれば問題は深刻です」

食糧監査で低ランクに指定された食料品は、バベルのひざ元には送られず、地中の廃棄物となる。その量は見れたものじゃない。おそらく残月の言うように、居住区一つを賄える程度の量が、毎日『ゴミ』として捨てられているのだ。限りある食糧を廃棄するという食糧飽和の感覚による産物。技術があるのなら、それらを再利用することも可能であろう。疫病や栄養失調等を過度に恐れて生み出された、潔癖なる食料品の選別が幾十年も続いている。合理に適う手段が、全て正しい道を行くとは限らない。

「ここに限らず、他の居住区も移住時代に建設された住居跡をそのまま利用していますが、真南区のいくつかの地域は既に崩壊しています。技術者の生き残りを集めて、何とか現在は住居区としての体裁を保っています」

「…いくつかの地域？ 本部はそんなに巨大な規模なのか」

「はい。機能している住居区は五区画あります。各区画に区画長を一人ずつ据えて、住人の管理と統制を行っています。私のいる総本部がそれらを統括しています」

「統括…。それじゃあの塔とやってる事と大差ないじゃないか」

そう言うと、残月は目の色を変え睨みつけてきた。…もつとも、暗闇の中で黒光りする瞳がそう思わせたただけだが。

「あんな悪魔の巣窟と同等にしないで下さい。然るべき人心の疎通が図られた上での理想的な協力体制です。蹂躪政策や圧力は存在しません。あるとしたら私が赦しません」

「分かった分かった！ そう怒るな、からかったただけだ」

「…人の心は繊細で複雑です。それを承知の上で、住人達と接してください」

「ああ…」

残月に気圧され、言葉を濁す。本部の人々は想像以上にその結束が固いようだ。もしそこに、本当に弾圧や差別、偏見が存在しないのだとしたら、かつてない理想郷だろう。平和を謳った者に抗った者達が、新たな平穏の一端を掴んだのだ。

「そこは、平和か…？」

「どういう意味です？」

「そのままの意味だ」

唐突に漠然とした質問を投げかける。柄ではないとは思うが、聞かずにはいられなかった。

「…そうですね。少なくとも他区よりは」

残月が肩を落とすのが暗闇でも感じられた。

「他は荒れてんのか」

「荒れている…。そうですね。居住施設そのものが荒れているだけ

ならいいのですが、人間自体も荒み始めています。レジスタンスの存在を知ってもなお、我利を欲した人々が大半です」

急に、まるで人を突き放すかのような言葉に、違和感を覚える。バベルに抗った者たちはみな、どんな事情を抱えていようと『同志』ではないのか？ 先刻の優しい眩きはただの聞き間違いだったのか？

「お前らはそれをどうにかしようとは思わないのか」

返答までに少しの間が空く。

「…それ以前の問題です」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味です」

詳細は言うに及ばず。そんな胸中が、切り返された言葉に宿っているようだった。

バベルが生み出した『無感情者』。ソフィアを束縛され、理性のみで日々を全うする人々。争いの源となる欲情が無く、無精神無感情という平行線のうで平等とされている。アイデンティティも大衆文化も同時に失われた彼らは、ヒトという歯車となつて機械仕掛けの魔塔を動かしているのだ。レジスタンス達は自らを守るべく新たな社会を拒んだ、いわば自我主義者だ。^{エゴイスト}両者の軋轢に耐えられず、ジレンマに押しつぶされた者たちがあふれ出しているのだろうか。何をもって『平和』なのかと、天秤を前に頭を抱える人々に、誰が答えを示すのか。

残月は分かっているのだろうか。それとも暗中模索で駆けずり回っているのか。抑揚のない声と情の無い瞳で、一体どれだけの人々を束ね、巨塔に立ち向かっているのだろうか。前へと踏み出す足は

華奢で、肉弾戦の経験などは見てとれない。滑らかで艶やかな肌は傷一つなく、諍い事の渦中にいるとは到底思えない。こんな軟かな男が、ただの自我に唆されて墮落しただけではないと主張する、確固たる意志を紡いでいる。…俺には理解できない。自分に主は要らない、感情のないヒトは人じゃない、と真正面から挑んだ俺と違い、残月はただ冷静だった。

バベルの外壁が、その中身を隠蔽するかのように無垢な純白であるように、残月の肌色もまた暗闇の中でも僅かな光を受けて淡白い光を放っていた。

(四) 地下 - ? - (後書き)

携帯で読んでくださる方々のために、小時間で読み切りやすいよう各話の文字数を少なめ(3000~3500文字程度、3ページ分程度)にしているのですが、いかがでしょうか? 文字数の事以外も含め、ご意見、ご要望、お待ちしております! PC読者の方々も是非お願いします!

(五) 安息

(五) 安息

誘導灯の列が途切れ、これから辿る道はついに常闇へと染まった。方向感覚を奪われ、無意識のうちに壁に手をつく。そして壁伝いに前へと進み始める。姿形は見えずとも人の気配というものは不思議と感じるものだった。躊躇いを微塵も感じさせない歩みの音、抑揚のない息遣い。それだけで、自分にはこの暗闇の中に残月が居るとそう確信できた。寝食を共にする間柄でもなければ、古き良き友人でもない。何の脈絡もなく突然に知り合った赤の他人であるはずなのに、所作言動の一つ一つでアイツの存在を感じる事が出来る。きっと、毛嫌いしている人物とは関係を結びたいとは思わないが、己がそうやって意識している限り全くの無関係では居られないということだろう。面倒なシンパシーだ、と呟きかけると、眼前を埋め尽くす闇の中にふと一つの光点が現れた。暗闇に浮かぶ光の粒は、細やかにその存在を顕示している。そして、永久に続くかと思われた通路の奥から、空氣の僅かな動きを感じ取った。

すぐ近くに大きな空間でもあるのか。

そう思った矢先、残月が光点に近づき、その正体を明らかにした。

「着きました。――ようこそ、レジスタンス管轄集団居住区画『真南区』へ」

通路に舒する機械音。そして突然、辺りは眩い光で満たされた。そして俄かに人の声が光に混じって聞こえてくる。音の存在が希薄だった時から、音に満ち満ちた時へと移り変わる。感覚が麻痺を起

し、暫くの間白の世界を彷徨う。ようやく目が慣れ視界が鮮明になる頃、次々と目に飛び込んできたのは様々な色彩だった。

頭上を埋め尽くすかのような青、赤、黄、橙、緑……。それは軒を連ねて通りを沸かす商店群のルーフだった。白く輝く光は、遥か上に備えられた巨大な人工太陽球機が放っている。目線を下に戻せば、バベルの立つ大通りと区別がつかない程の人混みが、視界を埋め尽くしている。突然押し寄せた世界の大波に啞然としてみると、残月が脇を通り抜けてその雑踏に歩み入ったので、その後を追った。

店先にはそれぞれの商店のルーフに負けない位の極彩色が所狭しと並べられていた。野菜、果物、豆類、肉……。とても低ランク食糧品の寄せ集めとは思えないほどの品揃え振りだ。長い間目にしなかった活き活きとした食物を眺めているうち、不覚にも食欲に駆られてしまった。腹の虫が眼前のエネルギーを欲して叫び声を上げ始める。ふと視線を感じ振り返れば、残月がこちらを見て苦笑していた。いつの間にか溢れる食物に釘付けになっていたようだ。因縁の輩に妙なところを見られ、苦々しい気分になる。

商店通りは活気に満ちていた。柑橘類の匂いや肉の焼ける香ばしい音が、通りを行き交う人々の頭上で弾けている。そしてなにより、ここを往来する人々は皆、表情豊かだった。喫茶店の外に設けられたテラスでテーブルを囲み談笑する人々、菜類を手に取り値切り交渉する中年女性とその店の主人、人々の間を縫って追い駆け合う子供達……。今自分の目の前で、人と人は語り、笑い、生きること、真剣になっている。自分の中で、もう全て失われてしまったモノだと諦めかけていたものが、この場所には溢れていた。

「残存する居住区域で最も繁華であると言われるのが真南区です。実情はご覧の通りです」

人混みの中を進みながら、表情を緩ませて残月は言う。だが言わ

れなくとも、此処の潔白は解りきっていた。バベルの魔の手を逃れ、忍んで暮らす人々とは思えない華やかさ。暗闇に巢食われた通路を越えた先に存在する此処は、光の都。心の通った人間の織り成す空間が、これほどまでに生命感に満ちているものとは思ってもよらなかった。そして、冷徹無比な男一人に情を湧かせるには、これほどの人間臭さは適当だったのだろう。鈍感で風来坊の自分でさえ、此処の人々が生み出す大気は心地よいと感じたのだから。

残月は大通りと思われる商店通りから、脇道へと誘導した。無感情者が跋扈する路地と打って変わって、此処の路地は閑散としているものの流れる空気は穏やかだった。速度を緩めた残月が、口を開いた。

「私たちは此処をエントランスと呼んでいます。住人達は勝手にモールとか呼んでいたりしますが、レジスタンスとして機能している部分を樹の根幹と置けば、此処は葉に過ぎません」

「つまりはただの生活区域ってことか」

率直な解釈を言ってみるが、残月は頷きもせず続ける。

「しかし、樹は葉が無ければ育つことはおろか、生きていくこともままならない。結局、生き延びるには相互理解が不可欠なのです」

人心の通った日常を送るには、相互理解を踏まえた上での協力体制が必要だ、とこいつは豪語した。しかしそれはただの絵空事、誰もが思い描く理想郷に過ぎないのではないのか。それがもし実現しているのなら、此処はさながら桃源郷ではないか。心が在るからこそ我欲が生まれ、軋轢が生まれ、衝突が生まれる。しかしそれを完全に抑圧した結果が無感情統制であり、非人道的な世界へと成り果てたのがバベルだ。どちらとも人間には不可欠な要素であり、そのジレンマを乗り越えることは容易ではない。果たしてその努力がで

きる人間が、一体どれ程存在するといふのか。

「残月」

「なんでしょう」

此処には、理想を現実にする術があるのだろうか。

「俺は此処で、何をすればいい」

残月は少しの間をおいて答えた。

「作戦自体は成功と失敗の半々でしょう。今は行動を起こす前に、次の局面へ移行するかの判断を仰がなければなりません。ですからあなたが今するべき事と言えば、休養をとる事ですかね」

「休養？ この状況で横になって寝ろってか？」

「陽楽さん」

残月はその小柄な頭をこちらに向けた。口調の割には目にいつもの鋭利さが無い。

「焦燥は冷静と集中を欠いている証拠です。現時点で得られている情報、行動可能な人員諸々を考慮した上での適切な判断ができなければ、私達以上に合理を弁^{わきま}えているバベルに適う筈がありません。幸い、此処は我が身を脅かす存在など皆無なので、安心していてください」

返す言葉を見つけれないまま、ただその言葉を飲み込むしかなかった。

安堵。安寧。安らぎ。バベルを望む暮らしを送っていた頃は、そんなものとは無縁だった。地下に身を潜めてからもそれは変わらず

にいた。しかしこの男は安心しろという。壁一枚隔てた先に、心無い人間が銃口を向けて立っているかもしれないこの状況で。しかし何故か、その言葉に懐柔させられてしまったかのように、身体の節々から力が抜けていくのを感じる。

「エントランスに連結している住居区は五つあります。陽楽さんは棟の入口で手続きを行ってください。それと――」

残月が懷から乳白色卵型の石を取り出して続けた。

「必要な時はお呼びしますので、その時昇降エリアに来てください」「昇降エリア？」

尋ねると、残月は天井を指差した。つられて見上げるが、そこには精錬石によって彩られ、今や誰の記憶からも消え去った空想の蒼空を映す疑似天しかない。しかし、その天井を貫くかのように聳える一つの塔が見えた瞬間、背筋が凍りついた。

「あれが昇降エリアの目印です。あれを目指してくださいれば結構です」

「いや、ありやどう見ても――」

「ええ、バベルですね」

まるでそう言うのを悟っていましたがとばかりに残月は言った。

「真南区は逆さ円錐型に設計された入植地で、主に廃棄物の熔炉とするのが目的でした。ですから、上下に長いためあのように巨大な昇降施設が必要なのです」

「あれが全部昇降機？」

残月が首肯する。レジスタンス本部が根幹で、此処エントランスが葉なのだとしたら、あの昇降施設群はさながらそれらを潤す維管束といったところか。広大な円形の生活区域の中心を貫いて聳えるそれは、真南区の栄華の源となっているのだらう。あの塔は、無感情の悪魔を生み出した塔とは全く逆の役割を果たしているということだ。…そう自分に言い聞かせる事で、先刻現れた悪寒を振り払った。

五つあるとされる住居区へは、それぞれへと通じる連絡通路があった。商店やその他施設が立ち並ぶ大通りに面するようにそれらは接続され、それが連結する住居区域では区画ごとに住居管理がなされているようだ。個人照合システムが導入されているらしく、残月の言った手続きはおそらくそれへの登録手続きのようなものだろう。エントランスの概要を簡単に説明した後、残月は本部に報告を入れなければと言って、行ってしまった。扱いにくい人間から解放されたことで肩の力が抜け、緊張は完全に弛緩状態となる。そして、C棟と呼ばれる住居区への連絡通路を見つかるべく歩き出した。

C棟の連絡通路は案外容易に見えた。アルファベット順に距離を置いて接続されているらしく、その入口自体も大仰な規模でその口を開けていたからだ。通路内部は広々としており、エントランス同様眩い光で満ちていた。人の往来も活発で、同じ地下で暮らしていたとは思えないほど、その生活感は一平穩そのものだった。

住居区域の入口に着くと、そこには大量の個人照合システムと区画へ通じる通路が繋がっていた。中央にそれを統括していると思われるブースがあり、住人達でこった返している。ブースに近づき、手の空いている女性職員に、残月に伝えられた旨を告げる。彼女は了解すると、登録手続きの手順を丁寧に説明しだした。話を聞いて

いる限り、システムの内容はバベルのそれと大差は無かったが、登録された内容が秘匿されるという事だけが唯一の違いであった。指紋、網膜、静脈、心拍、DNA……。個人を特定できるあらゆる情報を集約、データベース化しているこのシステムは、導入されたばかりの頃はやれ画期的だ先進的だと世間では大騒ぎだったそうだ。今やこのシステムは日常の一部と化し、情報社会の基盤となっている。先の地上の荒廃により、全世界を繋ぐネットワークは失われたものの、ひとつの国――現在は地殻内に点在するシエルターが住居能力を得たものをそう呼んでいる――を管理、監視するには十分の技術力が復活し、現在に至るわけだが、平和の礎となる筈だったあの塔が現れてから歯車は狂いだした。幾十年、百年かけても緻密に組み上げられた賢人の塔を解明することは困難を極めると言われているが、残月らはとある可能性を信じて疑わず、行動していた。――精錬石を用いた特殊な個人照合システム。それをレジスタンス達は、例の無感情統制の母体ではないかと疑っているようだ。しかし、詳細を知るわけではなく、自分自身は賛同しかねている。

登録手続きが終わり、晴れて真南区の住人となった。これで惨めな地下水脈探しをせずに済むと分かると、自然と頬が緩んだ。個人照合システムを設えたゲートをくぐれば、そこもまた広大な円環が広がっていた。残月が言うには、真南区は入植地時代、将来的に廃棄物の熔炉となる筈だった区域であると言った。その名残からか、エントランスのある区画はもちろん、住居区も逆さ円錐型をしていた。住居区は階層構造をとっていて、円周に沿って設けられた住居が層となって上下に延びている。中心にはハブとスポークの要領で、昇降エリアと住居のある回廊を繋ぐ連絡橋が架かっており、その他は吹き抜けとなっていた。落下と風圧の防止のために張り巡らされた強化窓から、階下を展望してみる。下層は遙か下まで続いていた。エントランスや連絡通路程の明るさではないため、ある距離からは闇となつて分からない。しかしそれは、この住居区がどれだけ巨大かということを暗示するものでもあった。また、階層を繋ぐ昇降工

リアや連絡橋が蜘蛛の巣のようにも見え、深層の不気味さも相まって神秘的な気分になる。この区域に一体どれだけの人間が住んでいるのだろうと思案していると、一人の青年が声をかけてきた。先刻の職員同様、小ざっぱりとした制服を着ているところ、おそらく彼も住居区を運営する職員なのだろう。登録した代わりに与えられた室番号を尋ねられたので答えると、彼はその位置を教えてくれた。礼を言い彼と別れると、自然と足が連絡橋へと向かっていた。安息を無意識のうちに求めている辺り、暢気になったものだと自分に溜め息を漏らした。しかし、舞い込んだ小さな幸福をみすみす逃すつもりもない。昇降エリアへと足を運ぶまでの間、終始自分の心は揚々としていた。

住居へとたどり着く。清潔感漂う純白の壁に浮かびあがるようにして、トルコ石のような色をしたドアが整然と並んでいる。そのうちのひとつの前で歩みを止めた。個人照合システムに手をかざし、ロックを解除する。扉が横に自動でスライドすると、部屋の内部が露わになった。白とベージュ、黒や茶といった落ちついてはいるが地味な配色で彩られた室内は、一人で過ごすには広すぎず狭すぎず、適度な空間となっていた。揃いに揃った生活用具に心を躍らせながらも、足は自然に寝具の方へと向かっていた。そして、崩れるように寝具に倒れこむ。包み込むような感触と匂いのシーツがたまらなく爽快だ。そして意志に介さず閉じた瞼に合わせるかのように、意識が遠のいていった。

（六） 賢路

（六） 賢路

昇降エリアは静寂に満たされていた。人影は見当たらない。ぼろ靴が清潔に広がった床上を擦る音だけが、空間に虚しく響き渡っている。表は人で溢れかえり微笑ましい日常が流れているというのに、施設内は疑心を煽るような冷気に包まれていた。そして、このどこか寂れた静寂は行きつけだったあの喫茶店を想起させた。役割を果たせないまま佇み腐りかけた椅子とテーブル。埃が薄く積もるカウンターと、さりげなく置かれたシュガーポット。人を持て成すべくして存在するそれらは、累々とその意味を投げ出し横たわっているかのよう。だが足を運べばそこに寂寥や疎外感は無く、一つだけの『感情』が錆び付いた心の還元剤となってくれた。ただ見下し道標を拵^{うづも}えるのみのバベルとは違う静けさを、あの場所は持っていた。そして恐らく、此処も同じなのだろう。

安心しろ。

形では存在し得ない心が通った温もりを、この閉鎖的な施設のどこかに見い出せる筈だ。闇と静に怯えているだけでは、いつかは守り続けてきた崇高で軟弱な宝玉を砕かれてしまう。砕かれてなるものか。奪われてなるものか。俺にはまだ、縋^{すが}る事のできる楯があるのだから。

昇降エリアへと赴く少し前の事。残月の呼び出しは、思い掛けない場所で起きた。眠りから醒めた後、空腹を埋めるためにエントランスへと繰り出した時、どこからともなく呼びかけられたのだ。その声は紛れもなくアイツのそれであるのだが、振り返っても姿はなく、連絡通路の往来の中で一人右往左往させられた。さらに驚く事

に、奴はこちらの言動を把握できているというのだ。

「お前今何処に居るんだ？」

「レジスタンス本部です」

「ふざける。んな事は解ってる。何処にいるんだと聞いてるんだ」

レジスタンス本部です、と残月は繰り返した。冗談を言うような柄じゃないと知っているだけに、虚仮にされているように思えて苛立った。

「いい加減にしろ」

「…。人間で行うソフィア交信を知らないのですか？」

「知ってる。だが俺は精錬石を持ってない。先刻お前が持っていたる」

「ソフィア交信は何も精錬石を媒体にしなければ成立しないというものではありませんよ」

どこからともなく溜め息が聞こえてくる。無知は罪とは言うが、知り得もなかった事柄をさも知っているかのように話される身にもなれ、と心の中で毒吐く。すると、残月が思いもよらない言葉を返してきた。

「そうですね。思えば、あなたには『錬金術』についてイロハのイの字も教えていませんでしたね。大変失礼いたしました」

残月の行っている交信法は脳波か何かで会話を行う類のものなのだろうか。心の中で呟いた言葉にアイツは返事をしてきた。だが慙歉な謝罪をされても、それは単に激鱗を逆撫でされるようなものと同じで、実際残月に対しての不平不満が許容範囲という敷居を跨ぎ越したような感覚に陥った。残月は次の行動が決定したので先程言

った通りに来い、と言うとそれつきり声を送りつけてこなくなつた。

精錬石媒体によるソフィア交信は、嘗ての携帯電話よりも遥かに非科学的で高性能だつた。記憶中にある人物のソフィアを利用することで、精錬石を介した通信、いわゆるテレパシー交信が可能となるこの技術は個人照合システム同様に波乱を生んだ。おおまかに言えば、何処に居ても思い出せる人物になら、その人物を思い浮かべながら精錬石に向かつて喋る事で、相手の胸中に声を発信する事ができるというのがこの技術だ。発信先が精錬石の所持者であるとか、一度会つただけ、人から聞いた人物像など曖昧な記憶では不通となるなどの制約はあるが、人物間の情報交換は飛躍的に簡略化され、^{たちま}忽ちのうちに普及した。しかし、この技術は庶民の手元に届くようになりふれたものではなかつた。その技術の先進性、独自性を他国に流出させないよう、国が精錬石の所持及び使用に様々な規制を掛けたこともその原因の一端だ。国の場合それは比較優位性の確保の為であろうが、些か人という生物は欲の為に費やすエネルギーは底無しだと呆れたことを覚えている。現在精錬石は高度な技術、豊富な知識、常識と理念を弁えた年齢を認められ、『錬金術師』と称される事でその所持が赦される。そしてそれに違わず、地下通路の漂流者がそんな高貴な物を持つている事など言うに及びはしなかつた。

しかし残月は精錬石が必ずしも不可欠ではないと言つた。確かに精錬石を所持していない俺に、アイツは発信してきたのだから。それはどういう事なんだ。鏡のように自分の姿を映す床上を彷徨いながら、そんな事を悶々と考え続けていた。すると突然残月の声が辺りに響き渡つた。遙か天井まで何に妨げられることなく届く音波は、人工の場所ではないかのような反響音を生んだ。声の方を振り返れば、今度は姿を確認できた。

「お待たせしました。行きましょう」

残月はそう言う、そのまま向きを変えて歩き出した。後を追えば、そこには昇降機の出入口らしき扉が見えた。壁に亀裂が入ったようにも見えるそれは、遠目ではただの壁面にしか感じられないだろう。残月がその扉に手をかざすと、扉は左右に音もなく開き二人を招き入れた。

どこまで降りるのだろうか。随分と長い時が経った気がする。倦怠感が生まれてくるような心地になる頃になっても、隣で前を見据えたまま直立している男は澄ました顔をしていた。しかし、密閉された空間の中、押し黙っていられると息が詰まりそうだ。沈黙に耐えかねて愚痴を零しそうになった瞬間、昇降機が突然揺れて止まった。あわてて飲み込んだ言葉で腹の中が不快になる。扉が開き、それと共に冷気が室内に流れ込んでくる。思わず身震いし、檻ぼろの中で鳥肌が立つのを感じた。残月はそんな自分の横を流れるように追いつくと、薄暗い通路を先立って歩いて行った。何も言わず、その背中を追う。

真南区へと続く地下通路よりかはいくらか明るい、人の目にとつてはこの暗さもなかなかの代物だ。寒々とした白色光が通路を照らしてはいるが、人影が闇に紛れてしまう位の明るさでは到底照明器具として機能しているとは思えなかった。さらにエントランスの燦然と降り注ぐ光を拝見した後では、此処の薄暗さは余計に濃く感じる。大した広さでもなく、人が横に三人並べば塞げてしまえる程だ。そんな狭い通路を黙々と進んでいると、ふと通路の壁に違和感を覚えるようになった。昇降エリアの扉のようなものがあるのだろうか、残月を見失わないよう気を使いながら、壁を眺めてみる。先刻の場所のような石質とは異なるが、鉄製や土製の類でもない。そしてよく凝らして見れば、何やら模様が刻まれていた。

…いや、違う。

模様は蠢いていた。薄暗い通路よりも濃い陰影を持つそれは、ゆっくりと幾つもの筋に分かれ、収束と分裂を繰り返しながら流動していた。意志を持っているかのようにも見え、そうでないようにも見える。残月が警戒していないところをみるとこれは無害なのだろうが、こんな不気味なものがレジスタンス本部に存在していることに驚いた。訳を握っていきそうな男に問うてみたかったが、それは出来なかった。

「ここが本部への入口です。新参は今回が初めてですから、くれぐれも言動は慎んでください」

残月は通路の突きあたりで立ち止まりそう言うのと、再び手を壁にかざした。薄暗い通路に光が射す、と思ったのも束の間、現れたのは深い紅と黒に彩られた大きな部屋だった。部屋のあらゆる所で色彩様々な光点が明滅しており、それに囲まれながら、暗くて判別しづらいが何かしらの機械の間を縫って人が慌ただしく行き交っている。最奥で唯一大量の光を帯びているのは、どうやら壁面に設えられた巨大なディスプレイのようだ。何を映しだしているのかはこの距離では判らない。

そして何より、一番目を惹くのが、部屋の中央に鎮座する物体だった。天井にまで及ぶスケールのそれは、畏怖さえ覚えるほどの代物だった。

…こんな巨大な精錬石、見たことが無い。

部屋に入り、近づけば近づく程その威圧感は増していった。人が携帯できるよう加工されたものとは異なり、原石として保管されているものに近いであろうそれは、とても個人が扱うようなモノではないように思える。おそらくこの石の傍で争いを起さうものなら、

その刹那、この部屋は火の海と化すだろう。冷静沈着がこれほどまでに求められているように感じる経験はしたことがない。石を刺激しないよう、感情の昂りは極限にまで抑えなくては。声に出さず吹き、黒光りする巨体を仰ぎながら唾を飲み込んだ。

「陽樂さん。こちらがレジスタンス本部の^{イチナギ}壱薙総司令です」

気圧されて視線を動かさずにいたところを呼ばれ、我に返って振り返った。

残月の隣に人が立っていた。そして、残月とならぶとその存在感の違いは明白だった。高齢であるが故に失う筈の色感や生命感を^{とう}滔々と湛えたその老人は、すらりと高い背からこちらを見据えたまま動かなかった。残月はそのまま言葉を続けている。

「この方はレジスタンスの創始者でもあります。ならばに、この組織に居る人々は皆、発足当時から戦い抜いてきた者ばかりです。前にも言ったかもしれませんが、ここの存在は口外禁止ですので、二度と住居区へ侵入しないでください」

存在の隠匿。それが意図するものは何か。おそらく、住民に知られてはならないような事が多くここには眠っているのだろう。

「わかった。要は此处で喰って寝ろっていうわけだな」

「まあ、そういうことになります」

残月の曖昧な返事に不和を感じていると、壱薙と呼ばれた老人が口を開いた。

「見たところ錬金術師には見えないが。どんな了見でこの男を招き入れたんだ？」

その言葉は自分ではなく残月に向けられたもののようだ。残月が一步後ずさつて答える。

「彼はバベル建設時に起きた第三期クーデター戦争の生存者です。また、御覧の通り、彼は錬金属性を持つている可能性が極めて高いと思われます」

「あのクーデターの生き残りか……」

老人はゆつくりとこちらに目を向けた。その眼差しからは、彼が抱えているであろう深淵なる高尚な頭脳が何を思っているかなど微塵も判らない。そして年不相応に精悍な顔を見れば、彼の掻い潜^{かく}ってきた戦火を想像することは容易かった。

「残月。いくらバベルに刃向かう意志を持つ人間だからと、安易に我々の元に引き入れるような真似は感心せん」

「……。申し訳ありません」

「だが――」

老人はこちらから目を逸らし、残月を見下ろしながら言った。

「彼の持つ可能性は我々に新たな一手を齎^{あづか}すだろう。よく見つけ出してくれた」

「有難う御座います、総司令」

残月は頭を深々と下げ、彼の言葉を頂戴していた。そんな姿の残月を見て、憐れと思うのは何故だろうか。

「ヨウラク、と言ったか」

不意に名を呼ばれ、無意識に、はい、と返事をしていた。壱雫はこちらを見下すような姿勢をとっている。

「あの塔に辛苦を？まされた事、しかと胸の奥にしまっておけ。我々は復讐心を矛にして闘う組織ではない。感情ある者こそがソフィアの激昂を最大限に駆使することが出来、君はそれを見込まれて此処に居るということを忘れてはならん」

それと、と老人はこちらに背を向け、モニターの光で浮かび上がるように影を伸ばす精錬石を仰ぎながら言った。

「私は此処に居る事を強制しない。これはただの殊勝な我儘だ。この男のな。君は選ぶことが出来る。此処に居るか、此処を出るか。もつとも、此処を出る場合には条件があるがな」

「条件？」

「ああ。しかもそれはきつと君が望んでいるものであるかもしれないが、どうか？」

俺が望んでいる事？ 何を言ってるんだ、この爺さんは。

「此処を出るといふのなら、一つ条件を呑んでほしい。それは我々が我々を護る為、並びに君の未来の平穩を約束するものでもある。どちらを選んでも君にとって不足は無い筈だ」

「その条件とは、一体何なのですか？」

煮え滾る疑問を言葉にしたのは、俺ではなく残月だった。壱雫の方も意外であったのか、言葉を詰まらせたかのような表情で残月を見据えていた。しかし、すぐに表情を取り戻し、言葉を続けた。

「その時は、陽楽。君のソフィアの一部を預からせてもらおう」

そんな事が可能なのか、という疑問よりも、その言葉を発した時の老人の表情に恐れを抱いた。覇気とも呼べるようなその迫力は、流石はレジスタンスを統べる男というところか。

「それが何で俺の未来の平穩に繋がるんです？」

老人は答えなかった。そして、答える代わりに懷から携帯用の精錬石を取り出し、それを突き出しながら言い迫った。

「選択しろ。残るか、出るか。選ぶ権利は君にある」

それは迷えという事だろうか。それとも本意を見せろということだろうか。どちらにせよ、既にその問いに対する答えは定まっている。

「残ります。バベルの深層を知るために、俺は自ら望んで残月に手を貸したんですから」

答えを聞いた壱雫は大きく息を吐くと、ゆっくりと石を懷に戻して言った。

「有難う。君のその屈強な意志、大いに歓迎する」

その言葉の端で、彼は微笑んだ。感情を持つ者こそが頭わにできる、自分の心情。その表情を見たとき、彼もまた一人の人間なのだと確信した。

人として生を受けた時、持つべきものとしてそれは知られている。今でこそそれは『ソフィア』と呼ばれ扱われているが、遠い昔、人の人らしさを形作るものとして考えられていたのは感情の他ならな

い。不可視であり、不定形であり、森羅万象の如く様々な力を生み出す『感情』。それを人の手によって支配するということはあつてはならない事だった。それは人の尊厳を、価値を、意義を、そして自由を奪うことだったからだ。

バベルはその禁忌を犯した。レジスタンスはそれを断罪するために奮い立っている。

壱薙が目指す理想が何であるのか俺には判らないが、レジスタンス、…いや、感情を守り続けた者としてやらねばならない事は互いに共通しているだろう。無感情という底知れない闇に立ち向かう者同士、その心境に通ずるものがあるのならば、俺は彼に尽力するだろう。俺が持っているという可能性を賭して、バベルの真相を明かしてやる。

部屋を横切り去っていく老人の背中は無表情に力強く、その足取りは滑らかだった。

(七) 激昂

(七) 激昂

壱薙が何処へと姿を消した後、元漂浪者を連れて巨大ディスプレイの前のデスクへと腰を降ろす。画面にはエントランスを展望するような映像が切り替わり流れている。人が血液の様に流れているのが一目で分かる。幾何学的にも見える軌跡を成して、群れ蠢く生に安堵を覚えた。

綺麗だ。

呟くと、元漂浪者は軽笑した。

お前頭どうかしてるぜ。

彼は恐らく、そんな風に言った。

そうだろうか。

予測のつかない不規則な歩み。

巡り進む人々が生み出す螺旋模様。

故意か偶然かその揺らめきの理由は知り得はしない。恐らくどんな賢人でさえも理解できず、どんな芸術家でさえ表現が追いつかないであろう。

その、人が人として生きるからこそ残す軌跡を、俺らは守っている。

これは義務ではない。使命だ。

歪な理を生み出し野放しにした人間の責任だ。地下に潜む疑心暗鬼と磊塊らいかいを取り除かない限り、平穩は戻っては来ないのだ。凍てついた地下で萌え出づる生を、ただの傀儡にさせてはならない。守り、

誇つてきた純真なるソフィアを以て、人が人として生きる事のできる世界を、取り戻さなくてはならない。

…彼は我々の刃となってくれるだろうか。

冷酷な剣戟に負わされた憎悪は、決して刃の毀れこぼではない。むしろその鋭さと狂暴さを増す源となる刻印となつて彼を支えるだろう。ただ、己の心に負けた時、それは意志に背いて現実に姿を現すことになるという事を危惧しなければならぬ。複雑に絡み合った簡潔な感情は、時に人を操り、狂わせ、いずれ現実へと乖離する。放たれた感情は他の感情に干渉し、励起させ、連鎖していく。そしてやがては生み出したものに支配される。そんな悲劇を演やるも演らぬも彼の一声にかかっている。幕を引く事ができるのも、彼だけだろう。

顔を少し傾け、横目で彼を捉える。隣で浅く席に腰掛け、ディスプレイに映るエントランスを仰ぎ見ながら、陽菜は顔をしかめていた。彼には到底、一秒ずつ移り変わる絵画の美しさを理解することはできないのだろう。

― 肉体言語でしかモノを語れない無知蒙昧、自らを顕す術を持たず生きてきた下愚。バベルに抗つて地下の地下に潜み、しかしそれに弾圧されるだけで何一つ事成さない人々を、俺はそういうものだと思つていた。自分に能がなくとも、理不尽をただ受け入れるという屈辱を味わわなくてはならない理由はない。突きつけ、強要された屁理屈を、違ふといつて反論しただけに過ぎないのに。何故受け入れる。何故赦す。何故逆らわない。

何故。

俺には、理解できない。

レジスタンスという組織を知ってもなお、腐敗した生活から抜け出そうとしない怠慢さに嫌気がさす。人であるからこそ与えられたソフィアを愚弄されて、不名誉だとは思わないのか。バベルに気圧され、恐怖に怯えるだけの人々には辟易している。

―そして隣に居る隻眼の男もまた、そんな流浪の民の一人だと思っていた。

彼はこの国を潤す地下水脈へと繋がる区間で、ひっそりと暮らしていた。地下水脈の支流を陣取って、不法な水源取引をする廃人が地下には黴^{かび}の如く蔓延^{はびこ}っているが、彼はそんな下等な生き物ではなかった。

煤汚れ、血に染まった羅衣を纏った姿を見た瞬間感じた、鋭気の無い殺気。余程慎重に対峙しなければ、隠された爪を見透かす事など不可能だと思っただけ、彼は沈着だった。陽楽は長く深い吐息をくり返し、うず高く積もった瓦礫や屍骸の山の天辺から俺に声を掛けた。

『生き残っちまったな』

地下通路を繋ぐ夥しい数の連結棟のひとつ、争いの残骸と共に横たわる彼は、俺の方を少しも見ずにそう言った。屍を砕いて入ってきた音で気配を察し、同志と勘違いしたのだろうが、それが本来に来訪者に向けられたものだったのかは今となってはわからない。絶望か達観か、それとも悔恨か。複合感情は高位にして不可解。きつと誰にもその真意の全貌を掴むことは不可能だ。そしてその言葉に込められた乱暴な情操は、俺を強かに殴った。生気を失ったような無感情者のそれにも似た声。感情を抱くからこそ顕れる含みのある言葉。地下にそんなどちらともつかない、いや、そのどちらをも持った人間が居るとは予想だにできなかった。

そして彼と正面から顔を合わせた時、隻眼の面から発せられる無言の訴えを、俺は聞いた気がした。

彼はバベルに抗い、末に平伏した敗者であった。

―第三期クーデター戦。

それは、バベルの建設を巡っておこった抗争の中で、最も凄惨なものだった。

無感情統制の樞^{からくり}を完成させ既に実行へと移していたバベルは、一期、二期の戦いで矛先を免れた感情者の纖滅を始めたのだ。人の意志が関わる戦いから、目的と効率、そして得失と因果を繋ぐだけの思考パターンのみで構成された、合理的な戦いへの変遷。

無感情はどの地平線においても、冷徹で、残酷で、非情だった。

経験と予測でしか対峙できない感情者達は、圧倒的な戦力と技術力、情報力、そして人々を活かすために発展していく筈であった『錬金術』を前に、ただ殺戮を受け入れる事しかできなかった。街を、地下を、住居区を、自我と感情を持たない人間の発するソフィアの剣槍が、戦場へと変えていった。住み慣れ、ようやく夢を見ることが赦されようとしていた時、夢を見ることができない人間にその幸福を奪われたのだ。

『そこは、平和か…？』

陽楽は言った。

戦争の生存者は尋ねた。

平和は在るか。

取り戻した欠片を繋ぎ、長い月日を賭けて漸く^{やっぴ}それは形を成した。真南区に在るのは真実だけだ。嘘偽りのない、仮初めと揶揄されることもない、真正銘。ただの道化と成り果てることもない、自由。己が抱く心に加護を受け、人々は狭き世界で本来の姿を取り戻

しつつある。

もう一息だ。

天を仰げば地獄。そんな現実を覆すために、あの塔を消さなければならぬ。そして、そのための力が今まさに蓄えられつつある。

人の結束を怖れた神は、その塔の建立を妨げた。

人々は言葉の壁に阻まれて内部から分裂した。

それは莫大な数の命を狩った大洪水の地で起こった怪奇。

この町でも数えきれないほどの生が散った。

そして今、再び人々は結束を固め動き出しているのだ。

緻密で綺麗な人の心を束ねた平和を再構築するために。

「残月」

元漂浪者が俺の名を呼ぶ。素っ気のない淡白な、しかし判然^{はっき}とした声。

「レジスタンスは錬金術師を探しているのか」

「総司令の言葉を気にしているのなら、それは杞憂です」

「…そうか」

錬金術は心得の無い者には扱えない。感情の昂りは人を支配し、それを制御することは困難だからだ。少なくとも、円満な暮らしを送っている人々には。

「どうしたら使えるようになる」

「あなたには使えません」

陽樂が訝しむ。その顔には明らかに疑惑の色が浮かんでいる。

「使えない？ 素質はあるのか」

「勘違いしないでもらえますか」

「何…？」

「錬金術を行使する第一条件として、まず精錬石の所持があります。大変稀有な物質の為、その行為にも様々な制約が付き纏います。あなたは第一に、その一番の条件を満たしていないのです」

そしてその有限物質を手に入れることは、彼にはできまい。

「ならなんであの爺さんは俺を認めた？ 俺の何を認めただ？」

答えは無い。

全ての答えはあの老師が握っている。

俺にはわからない。しかしあの賢い人なら、この秘めたる可能性の使い道を知っている筈だ。

―あの男なら。

しかし、僅かな希望を秤に載せかけた時、それは音を立てて崩れ落ちた。

「残月！」

陽樂が突然吠えた。

刹那、脳天を穿つようなけたたましい轟音が本部内に響いた。

爆音に共鳴するがごとく、ブースの中央に鎮座する精錬原石が震えだす。

咄嗟に席を立ち、元漂浪者に向かって飛び込んでいた。されるが

ままに捲き込まれ、倒れこんだ陽楽は悪態をついたが、その次の瞬間には息を呑んでいた。

精錬原石から数多の炎の蛇が噴き出し、精密機械やレジスタンス達に襲いかかっていた。逆巻き踊り狂いながら、炎はあつという間に辺りを焼き焦がし、熱風と極度の乾燥の所為で忽ちのうちにレジスタンス本部は灼熱地獄へと化した。熱で視界が歪む中、己の目は信じ難き光景をしかと捉えていた。

「真南区が…」

ディスプレイには、先のクーデターを彷彿とさせる惨たらしい光景がまざまざと映し出されていた。

聖人君主を思わせる純白のローブを纏った人間達が、列を成しゆつくりと前進している。そして各々、手には半透明乳白色の石を持ち、どれもこれも禍々しい灰色の光を撒き散らしていた。

その光輪からは感情の激昂が噴き出していた。

鮮やかに色彩を湛えていた商店群のルーフは、ただの炭塊となつて通りに累積している。

若人達が談笑していたテラスは、灼熱の中で歪な形の氷壁に閉ざされている。

通りを走りまわっていた子供達、通りを闊歩していた人々は、無感情者の放った銃弾と炎を浴び、その姿を捉える事はもうできなかった。

やはり無感情者が操るソフィアは、とても常人が持つ美しく麗美なものではなかった。

あれは町を碎き、人を齧り、心を灰にする。

一刻も早く、救わなくては。

「行きますよ」

熱で肌が溶け、皮が剥げる。しかし痛みを気にかけている時間は無い。痛みを感じているうちは、まだ命があるということだ。

レジスタンス達は、精錬原石の袂たもとにいた者を除けば、皆無事のようだ。手に精錬石を持ち、襲いかかる炎の渦に抗っている。

しかし、励起状態となった精錬石を鎮める事は、今やただの時間の浪費だ。

後ろで陽楽が身体を起したのを感じると、彼はそのまま駆け出した。

何も言わずその後を追う。

熱風が頭髮を撫でるたび、掻き毟りたくなるような痛みが頭皮に走る。心臓もはちきれんばかりに拍動し、命の限界を警告しているかのような。しかしそれに応えている時間は無い。

本部を抜け出す事に成功し、荒れ狂う熱が籠った通路を駆ける。

陽楽の背は陽炎のように歪み、それは此処の熱さを物語っていた。熱が息とともに肺に入り込み、その粘膜を焦がす。

嘔吐を堪えるように腹に力を入れ、その痛みに対抗する。

いけない。総司令。彼はまだ本部に居るのだ。

懷から石を取り出す。

それを口元に近づけ、あの老人に向けて言い放つ。

「総司令。真南区が襲われています！」

声は反響し、どうやら前に行く元漂流者にも届いたようだ。彼は疾駆しながらこちらを振り返っている。

「本部の精錬原石も、上層の激昂に感化されて励起状態に陥っています！ 此処は危険です！ 一刻も早く――」

――残月。

それは身体の奥から発せられていた。壱薙が声を寄越したのだ。

―あの隻眼の男、あれが奴らを此処へ呼んだ。違いない。奴が悪魔を此処へ呼んだのだ！

壱薙。

穏やかじゃないな。

バベルと闘い続けてきた男が、ソフィアに、己に、掻き乱されている。

何かがおかしい。

何かが。

―怨恨に塗れたソフィアを感じた時、撃ち殺しておくべきだった。残月、お前にもこの結末が見えていた筈だ。それだのにお前は、小悪魔の甘言なんぞに惑わされおつて。私はお前に失望したぞ。…いや、お前だけではない。奴らをいとも簡単に招き入れたお前ら全員にだ！ 漸くここまで…。後少し…。ああ、私は奴らが憎い。憎い！

「総司令、お気を確かに。今は住民の避難が先決です！」

―殺せ。殺せ。あの悪魔どもを。血へド吐くまで捌り殺せ！

ソフィア。

それは人が人であるための源泉。

それを犯された今、おそらく彼を鎮めることなど誰にもできまい。

…しかし、これは想像の域を超えている。

“人のソフィアを犯す”？

人のソフィアを励起させ、あたかも錬金術を行使した時のように

その感情を発現させる。

「バベルは人の心をも弄ぼうというのか。
奪うだけではなく、遊戯にしまおうというのか。」

「どうした、残月。爺さん、やられたのか？」

「ソフィアを乱されて発狂しています。私達のソフィアもいつ暴走させられるか判りません。ですから、どんなことがあっても平静を保ってください。」

陽楽は首肯すると、前を向き直り速度を上げた。地下戦場で養われた身体能力、とでも言うのだろうか。彼の踏み出す一速は、憂いや慈悲を内包しつつも、非情な正義感に満ちていた。

(七) 激昂(後書き)

投稿が少々遅くなりましたことをお詫びいたします。今後ともよろしく願います！

（八） 炎上

（八） 炎上

昇降機の扉が開くとともに駆けだし、ホールを横切る。

空気は風ぎ、少しの雑音も聴こえない。重く詰まった静寂が、まるで俗世を拒むかのように荘厳なホールに満ちていた。

ホールと真南区エントランスを隔てる大扉の前に着くと、残月が何かを放って寄越した。

それは拳銃だった。

これはすでに使われたもののなか、それともまだ使われずに済んでいるものなのか。

続けてその弾倉を手渡すと、残月は重厚な扉を睨みつけた。

「まさか、ここまで来られるとは夢にも思いませんでした」

後悔とは違う失望感を乗せた言葉を、彼は口にした。嵌めている手袋を直す手が微かに震えている。

歪な世界から隔離された平和。虚ろで怠惰な時間の廻り合いではない、全き平和。巷薙が本当に目指したものとどれだけ似通っているかはもう知る術がないが、この青年が思い描いた理想の尾っぽを掴んでいたものには違いない。それを踏みにじられ、灰にされつつあるのだ。

今この瞬間にも。

「陽楽さん。彼らは自我を抜き取られているだけでなく、思考判断を除いた全ての精神感情を持っていません。最低限ヒトとして機能する程度のソフィアを持っているだけです」

「ようはただの機械人間だろ」

大扉に手をかける。すると、残月が呼びとめた。その声にはいっ
になく緊張が含まれている。

「ソフィアは神経や感覚といった器官にも同様に潜在します。…そ
の意味がわかりますか」

「こんな時に謎かけしてる場合じゃないだろうが」

残月も俺と同じようにして扉に手をかけた。そして呟くように言
った。

「つまり彼らには痛感がない。痛みを感じないのです。ですので、
狙うなら必ず急所を。それ以外は彼らにとって被弾していない事と
同じです」

扉が開かれると、焼かれた空気が纏わりついてきた。

吹き荒ぶ熱風。

逃げまどう人々の悲鳴と怒号。

暗闇で揺らめく火柱。

隆起と断裂を繰り返す道と壁。

血。屍。薬莢。

扉を抜け、数時間前までの姿を一欠けらも残さずに眩ましたエン
トランスを踏みしめ、折り重なりバリケードのようになった商店群
の影を縫いながら辺りを窺う。

錬金術とはまた珍奇な現象を生み出すものだ。荒々しくも静かに
聳えている黒光りは、なんと氷の柱だった。時を知らせる筈の鐘楼

がそれに包まれて止まっているのが見える。そしてその柱の麓では烈火のごとく家々が焼けている。氷の柱は解ける様子を微塵も見せずに、その奇異な光景を見せびらかしている。

しかしそこに、美しさを感じる余地などなかった。

氷柱と火の海にまみれたエントランスを、残月はその間を探るように進んでいった。

生存者を捜しているのか、周囲を警戒しているだけか。その挙動が慈悲や恐怖からくるものではないのだとしたら、狂気に犯された鬼のようにも見える。彼は、この惨状によって掻き乱されているのか。いつになく冷静を欠いているように見える。だが彼が戦いの最中に取り乱せば、それこそ犬死だ。

彼と協力しなければ。

だが、俺に何が出来る。

何が出来るのだ。

能も知恵も至らない、無の俺に。

戦争の生き残りだからと残月は言った。

それはどうということなんだ。

この潰れた左眼が錬金術を齎すと残月は言った。

それは本当なのか。

「動かないで下さい」

残月はある商店の瓦礫に身を潜め、遠くを指し示した。

やがて視界の端に白装束を纏った者たちが現れた。彼らの標準を逃れるように、物影へと飛び込む。息を潜め、瓦礫の間からその姿を目で追う。紅と黒で埋め尽くされた視界の中で、陽炎となって揺らめく白はひとときわ明るい。こちらからしてみればあのような格好で躍り出れば、間もなく命は無い。ならば、彼らには潜む必要などないというのか。それだけの傲慢はどこから作り出されるのだ。

突然、どこからともなく銃声が聞こえ、白装束が一人地面に倒れ

た。そして次の瞬間には、それ以外の白装束が報復として音のした方へと炎を放っていた。炎は蜷局とくろを巻きながら一直線に舞い瓦礫に直撃した。忽ちのうちにその辺りは炎上、溶解し、生々しい赤が一帶を染めていった。音が鎮まるころ、倒れた白装束がすぐと立ち上がり、平然と再び歩みを始めた。

隣で息を殺して様子を窺っていた残月が口を開いた。

「こんな子ども騙しで欺ける相手ではなさそうですね」

子ども騙し。

このかくれん坊の真似事をそう言いたいのか。

「彼らは見ない。感じて動く。…厄介です」

そう言うつと、残月は地面に屈みこみ、乳白色の丸石を足元に置いた。

——精練石。錬金術の源。

「陽楽さん。彼らはもう視界内にはいませんね」

「ああ」

ふいに、足元が仄かに明るくなる。残月が両手を丸石にかざし、沈黙していた。

…この輝きには見覚えがある。

「なにする気だ」

残月は押し黙ったまま動かない。そして自分の肌が周囲の異変にいち早く反応を示した。

毛が逆立ち、鳥肌となっていた。まもなく、感覚の中に冷気を感じるようになってきた。

「なにする気だ」

再び訪ねるころには二人を包む瓦礫の山は氷の礫で覆つぶわれていた。足元で小さく揺れ始めていた炎を、もろとも包みこんだ氷が不気味に光を帯びている。

「冷涼感鎮静を促します。熱にうかされたままだと、簡単に彼らに見つかってしまいますから」

確かに、うだるような暑さの中よりも、此処の方がいくぶん冷静に周囲を見渡せる。

怒りも、恐れも、悲しみも憂いも、今はどれもが心の乱れとなつて自分を危険に晒す原因となる。乱心は暴挙を、あるいは消沈をよび、自分ひいては仲間の命をも失ってしまう可能性に近づけていくそう、いかなる戦場においても冷静を欠いてはならないのだ。だが……。

吹き出す炎の威力。目で見たのだからあれは現実だ。しかし機械も武器も使わずに、あのように強烈な炎を吹き出すことができるとはいったいどういうことなんだ。想像の域を果てしなく超えている。バベルは、バベルの生み出すものは本当に悪魔なのか。

「残月、さっきのありやなんだ」

「炎のことですか」

頷く。

残月は、錬金術です、と一言いうと再び瓦礫の間から周囲を探り始めた。

予想通りの答えに、恐れを感じた。

氷の礫に囲まれていなければ、俺はきつと慄おのいてまともに銃を握れなくなっているのだろう。怒りや哀れ、平和を純粹に享受していた人々のための報復など、おそらく考えられなかっただろう。

それだけ、うずく恐怖と焦燥は強烈だった。残月がいなければ、俺は何も出来ないのか。無知が引き起こす能力の差が、痛い程よく判る。

「陽楽さん。僕は少し離れた所にもこのこと同じ処置を行ってきます。その間見張っていてください」

「ああ…」

「必ず、見つかる前に行動を起してください」

残月は瓦礫下の空間から這い出すと、足音を立てずにどこかへと去っていった。戦術的何かがあるような言い方だったが、単独行動でよかったのだろうか。

ふと、近くで瓦礫が砕ける音を聞いた。

それは火が爆ぜる音ではなく、なにか大きな質量のあるものが木片を砕いたような音だった。

そして、再び彼は現れた。今度は白装束も一人のようだ。

静かに拳銃を握りしめ、狙いを定めた。体躯は普通の人となんら変わりはない。髪色も小さな所作も、それはどう見ても人間なのだ。その眉間に向けて銃を握り締め、俺は息を殺しているのだ。

息を吐いてしまったならば、忽ちあの掌から炎の渦が迫ってくるのではないかと思った。

ゆっくりと引き金に手をかける。対象物は徐々に距離をつめてきてはいるが、こちらに気づいてはいないようだ。しかし、自分の眼の焦点はどこでもないどこかに結ばれていた。直視できない何か

彼らには、あった。

もう、この距離ならば確実に仕留める事が出来る。この町を灰にした張本人を。

ゆっくりと引き金に指をかけたその時だった。

背後でちいさな破碎音がきこえ、振り返った。

黒の艶やかな髪をした青年がそこに居た。

「離れましょう。彼らのおおよその巡回、潜伏箇所がわかりました」

残月は静かに小さな声でそう言った。

頷いた後、視線を再び白装束に合わせようとした。しかし彼は背を向けて距離を離してしまっていた。

瓦礫から這い出し、再び熱の中を走り抜ける。

残月は今まで見たどの瓦礫よりもうず高く積もったものに忍び込んでいった。

その中にできた空間は既に氷の礫に覆われており、隙間からは町にたゆたう火の海を見せつけられていた。眼下には、見張りだろうか、一人の白装束が立っていた。

「あれを」

残月がそう指図するところには、俺は既に彼に向って銃口を向けていた。

引き金に手を掛ける。

消音機の乾いた音を聞いた瞬間、眼下の白装束は倒れた。

射止めたのを目認すると、残月は素早く瓦礫の山から下っていった。すぐその後を追う。

少し走った後、背後の瓦礫の山が大きな音をたてて震え崩れていった。おそらく、駆けつけた他の白装束に炎を浴びせられたのだろ

う。やはり、奴らの反応、伝播速度は早い。それが判っていないければ今頃は瓦礫の中で炭塊だろう。

残月がまた別の瓦礫の山に這っていった。

その空間もまた、町より少し高い所にあり、眼下では崩れた商店が黒煙をあげていた。

狭い空間のなかで身体を捻り、銃に弾を込める。指から伝わる冷たい感覚が、じわじわと心から情を奪い、畏怖を満たしていく。

——奴らは感情を持たない。人間じゃない。

得体のしれない嫌悪が募る。それは一体何に対して放ったら良いのかすらも判らなかった。

耳を澄まし、集中する。火が揺らぐ音の中に、足音を探る。顔は乾き埃にまみれ、拭えば手が灰で黒く染まった。身体を冷ます汗は出ず、擦り切れて穴が目立つ羅衣が熱をうけて、全身を焦がすように身体に纏わりついてくる。

全身が火照っていく。

しかし、熱くは無かった。

火傷による痛みは感じているはずなのに。

感情、感覚を失くしてしまったのか、俺は。

辛いとも、苦しいとも、悔しいとも、何も思わずに目を凝らし続けていられる。

ただ目的を見失わないよう追い駆け、狙いを外さないよう意識を集中し、射止める。確実に。

その考えだけが頭を廻り、支配していた。

まるで、その傍らでうずくまる感情を抑えつけるかのよう。

(八) 炎上(後書き)

大変長らくお待たせいたしました。次話は年内にも完成させたいです。

（九） 炎獄

（九） 炎獄

銃を握る手が震える。皮膚は熱に晒されていても、指先の血は凍りついたかのように冷たい。銃身に冷やされた訳でもなければ、外気が極寒という訳でもない。内側から、徐々に冷えていく感覚だ。髓が凍てつき、血は止まり、筋組織は悲鳴をあげる。血の通わない末端から少しずつ“冷静”に蝕まれていく。とても落ち着いて狙いを定めることなどできなくなってしまうていた。

鉛の弾一つで、生身の人間は息絶えてしまうのだ。炎に巻かれるにしろ首を切りつけられるにしろ、その全ては一瞬間。いつ、自分の意識と視界が消えて無くなるか判らない恐怖より、視界以外の情報をも加味した迅速な判断力で己を満たさなくてはならない。

奴らは人間ではない。

情も怒りも通じない、化け物。

純白の布地を頭から被り、施された赤い刺繍を煤で染め、その細長い指と色白な掌から猛々しい炎を放つ、ヒト。…いや、ヒトの姿をした兵器だ。ならば、そう、躊躇う必要などない。引き金を手にかけ、その哀れな身の上を解放してやればいいのだ。ヒトからヒトに非ざる存在へと変えられてしまったその身から、彼らそのものの解放を手助けしてやればいい。そうだろう？

――…偽善者。

俺自身も、多くの人を失った。バベルの起こした平和という名の蹂躪によって。

—ソフィアさえ戻ればそれはヒトなのだ。

俺は逃げることに精一杯で、武器を握ることもままならなかった。

—それを、嘗てヒトであつた者を、今この手で…

そのうち、短剣を手にした白装束と組み合つた。彼の目にはまだ、人並みの感情が残っていた。そして、時が流れるほど彼は狂氣に目覚めていくのだった。

—殺すのか。

…殺した。奪い取つたその短剣で。

自分も痛手を被つた。

左目と、他のどこかに。

今なら、その時の男が無感情者へと移り変わつていたことが理解できる。力の拮抗した取っ組み合いのさなかに彼が見せた怯えは、不可視の脅威に追われているかのようなうだった。それだけだったならば、俺にはまだ手を差し伸べる余裕があつたかもしれない。だが、彼は既に自分の持つて生まれたものを平和に献上した後だった。彼にも他の誰かと同じようなさやかな日常があつただろうに。偽りの平和と見せしめの正義に酔つて、己を差し出してしまったのだ。哀れだ。

…助けてやりたかつた。

だが今、目の先に居るあれはなんだ。辿つてきた経緯は同じ筈だ。まるで本当の悪魔ではないか。なのに彼らがこんなにも憎く、それでいて哀れ、と思つてしまう。何故そんなちぐはぐな軋轢に苛んで

いるのだ、俺は。

ひとつ、またひとつと銃弾を放つ度、その精度は落ちていき、その場を一刻も早く逃れなければならぬ事態に陥った。己の手が使い物にならないと理解した瞬間、底知れない恐れが湧くのがわかった。武器の有無でこれほどまでに自信が揺らぐとは。幸いまだ姿は見られていないのか、追跡される事はなかった。疲労が倦怠を誘い、いつの間にか鉛のように重くなった両足を投げ出し、地に手と尻をついていた。

「彼らの意思疎通能はかなり高度です。このままでは危険ですね」
「囲まれなければいいだろ」

言った後、残月が俺の顔をゆっくり見下ろすのがわかった。

「今、その状態に追いやられているんです」

纏っていた白衣を脱ぎ捨てながら、残月が零した。その内側から薄手で黒色のローブが現れ、その背には葉と蔓が絡まり合ったような紋章が刻まれていた。

彼の再び口を開く。

「手が震えるようですね」

その言葉には、「ああ」と素っ気なく答えていた。銃の腕を買ってくれるまでいいが、貶される筋合いはない。かと言って、言い訳がましく白装束のことを口に出すのも癪だった。残月は舌打ちを堪えるかのように口元を歪め、瓦礫の山の天辺を見据えている。奴はこの地を見捨てるつもりは毛頭ないのだろう。だがおそらく視界に入る人間以外に、生きている者がいるという望みは薄いのではない

いか。

「あそこへ」

残月は氷に覆われた鐘楼を指差した。エントランスで唯一人々の認知できる時を生み出していた、あの鐘楼だ。その麓では未だに炎が群がっている。焦点を合わせようと目を細めるが、乾いた眼球に塵がこびり付き長い間目を開けていられなかった。

ふと視界の端に、エントランスから各地の地下シエルターを繋ぐ連絡通路へと抜ける扉―稼働隔壁が映り込んだ。閉鎖空間であるエントランスで四方八方を塞がれば、逃げ場はない。だがせめて壁を背にできれば、アレがある。まだ活路はあるはずだ。

「残月」

汚れた上着が被った煤を払いながら立ち上がる。この羅衣は破け、焼き焦がされ、穴だらけの羽織物と化しており、外見は殆ど上裸状態だった。

「生存者は」

残月は答えなかった。代わりに弾倉を放ってよこし、言った。

「これを使ってください」

焦ってるのか、残月。

「もう無駄だ。何も残っちゃいない。ここを守るより、他の区と連携を組むのが先決じゃないのか」

「まだ、ありますよ」

「何が」

「ここに、レジスタンスの端くれがいるじゃないですか」

残月はそう言って懷から精錬石を取り出し、苦笑した。

笑いやがった。奴は焦っているのか？ 違うのか？ その笑うことのできる余裕はどこから生まれている？ 訳が分からない。その無遠慮な自信はどこから湧いて出ているのだ。

「他のレジスタンス達はどうなった」

「施設の復旧作業に追われているか、石の暴走に巻き込まれて全滅でしょうね」

「連絡はとれないのか」

「音信不通です。今本部に返ることができれば、内情を把握することは可能でしょうが」

「なら戻ろう。このままじゃ危険だ。お前なら分かってる筈だ」

「ええ。ですがもう少し、堪えてくれませんか」

どういう意味だ、と言いかけた時、後ろの瓦礫の山から熱風が吹きつけた。途差に壁に使えそうな瓦礫の物陰に飛び込むが、爆発を凌げるほどの強度は無かった。砕け飛ぶ構造物の直撃をともに受け、下敷きになる。呻く暇すらなく、次の瞬間には金属が弾け合う音と炎が爆ぜる音に感覚を奪われた。熱が喉から体の中へと入り込み、激しい吐き気に襲われる。しかし震動が収まる頃、流石に死を覚悟していたにもかかわらず、手足は気丈に働いた。手近にあるパイプ状の金属片を掴むと、それをてこに使ってのしかかる瓦礫を押し分け、身体を起こした。熱風が吹き付けてきた方角へ目を凝らす。火の粉と黒煙の中から、彼らは白い衣を纏って現れた。心臓が弾むように拍動しているのを感じた。

――勝てない。

極端な思考が頭を支配する。今はただ、命が惜しかった。そして、自分を護ることにに関して、自分は無力に等しかった。

―助けてくれ、残月。

高く積もった瓦礫が先ほどの震動で重心をずらされたのか、ゆっくりと崩れ始め、間もなく崩れ落ちた。

磊落らいがいを押し分け、立ちのぼる粉煙の中へと走り込んだ。あそこへ、と呟き、白装束に背を向け走り続けた。

氷柱に寄りかかり、エントランスの天井を仰いだ。肺が酸素を求めて疼き、網膜は水分を求めて涙腺を震わせている。どうか、巻いたようだ。残月の姿はないが恐らく無事だろうと、無理やり思考に余裕を与えた。視線を下げ、崩壊した街を眺める。この場所からならモールを環状に走るメインストリートを見ることができ、通りに接するように立つ鐘楼が見える。ただ、今となつてはその一帯は氷に閉ざされ、その氷塊の内側で黒々と炎が揺れていた。その奇妙な光景に見飽き、自分が駆けてきた道を一目した。其処そこには見覚えのある建物が前のめりに倒れかけているのが見えた。

真南区に訪れたばかりの時に目につき、威勢のいいオヤジが居た、あの店だ。

―「兄さん、腹減ってそうだな」と、店の主人が店先の色鮮やかな食材を眺めている俺に近づいてきた。残月の呼び出しを受ける少し前、羽伸ばしにエントランスへ出向いた時だった。

「どれもいい色してるだろ？ 添加物の色でも何でもねえ、そのま

んまの艶だぜ」

「確かに新鮮だな。裏に畑でも持つてるのか」

「いやいや、そうじゃねえ」

主人は振り返り、昇降エリアの辺りを指差した。

「あすこだ。あすこからトラックに積んで運んでくるのさ」

その言葉を聞いて思い出す。真南区の食糧は食糧施設に分別された規格外の品で賄われているのだ。

「供給がないときはどうするんだ」

「いやいや、そんな時はないさ。もちろん、ここに並んでる食糧がなくなることもないぜ」

主人は俺の目の前にある深緑の菜っ葉を掴むと、突き出して言った。

「なんなら食うか？」

「悪い、文無しなんだ」

「いやいや、要らねえ要らねえ！それに誰も咎めやしないさ」

言われるがままに菜っ葉を受け取り、口へ運ぶ。苦味を連想させる色合いに構わず、豊かな甘味が口内に広がった。

「…美味しい」

「だろ？」

主人は勝ち誇ったように哄笑した――

突然けたたましい音が轟き、追憶から引き戻される。

爆煙が登り、断末魔と共にその建物は崩壊した。

崩れた建物の向こう側からのそりと白い衣が現れる。

その姿を認めるや否や自然に体が動き出し、鐘楼を包む氷の一帯へと走り出していた。

どこへ逃げても奴らは追ってきた。何を頼りにしているだって？ ソフィアの揺らぎを感知して、だと？ そんな技術、一体どうやって手に入れたんだ。それに、あの炎もソフィアの生み出す激昂がもたらすエネルギーの産物だという。ヒトのもつ感情をあのような破壊的な存在へと変えるために、いったい何がなされたのだ。わからない。教えてくれ、残月。

「陽楽さん！」

後ろから呼びかけられ、振り返る。氷の壁に張り付き、息を切らしている残月が目についた。身にまとっていた黒色のローブは引きちぎられ、顔には斜めに細い裂傷が刻まれていた。

「こっちです！」

そう言っ て残月は氷の壁にできた壁龕へきがんにしゃがみこんだ。素早く走り寄り、自分もそれに倣う。

「いいですか。今からここを氷で閉ざします。その時数センチの穴をあけておきますので、そこから奴らを狙撃してください」

「ちよつと待ってくれ。今俺は――」

「お願いします」

残月は再び乳白色半透明の丸石を握りしめ、息を整えた。丸石が

おぼろげに光を放ちだすと同時に、徐々に足元が氷で覆われ始めた。しかし、二人を包めるほどの大きさに氷が成長しない。残月の石を握る手が震えだした。呼吸も乱れがちになっている。

「残月」

肩に手を触れようとした瞬間、精錬石の輝きが増した。氷結の速度が極端に早くなり、見る間に目の前に氷壁が生成される。小さな孔を残して氷が壁龕を完全に覆い尽くすと、残月の手から石が零れ落ち、彼は両手を地面について肩を震わせた。

「標的は、あと二人です」

残された弾は十三発。相手がただの人なら、十分に余裕がある状況だ。だが…。

「残月、ここは退こう。相手が少ない今なら確実だ」
「何が確実なんですか」

残月は睨み返してきた。その目からは涙が滲んでいた。

「僕たちの命が助かることが確実ですか。それとも標的を一掃できることが確実ですか。いずれにせよ大きな状況は変わりありません。しかしせめて報いなければならぬ事実があるんです」

「報いることはいつでもできる。だが今はできない。あまりにも分が悪すぎる」

「そんな筈はない！」

残月が氷の壁に拳を打ち付けた。分厚い壁は微動だにせず、鈍い音が狭い空間に響いた。

「現にあなたの撃った弾は標的の数を減らしています。可能性は全くゼロではありませんよ」

「だが…」

「彼らを鎮めることができれば、この地から逃げることなど造作もありません」

「俺の手が」

「…陽楽さん。お願いします」

その懇願はため息を吐くかのようなだった。そしてそのまま地面に臥した。

慌ててその胸に掌を重ねる。拍動はある。死んではない。おそらく気を失ったのだらう。

氷の粒が潰れる音を聞き、咄嗟に外に目を向けた。白装束が氷壁に囲まれたこの広場に足を踏み入れていた。無意識に銃を向け、狙いを定める。手の震えは収まらなかった。冷たく、指先はまるで氷に覆われてしまったかのように動かない。神経を可能な限り研ぎ澄まし、ゆっくりと引き金を引いた。乾いた銃声こたまが訝し、白装束が一人倒れた。もう一人が素早く身を翻し、こちらの方へと掌を向けた。光が迸り、炎が目の前の氷壁にぶつかり拡散していく。しかし小さな孔から炎が噴き出すことはなく、拡がっていく炎が氷を解かすこともなかった。炎が止み、黒煙の中から最後の白装束が歩み出てる。再び銃を構え、狙いを絞る。

掌がこちらを向くのと銃声が鳴ったのは殆ど同時だった。乾いた発砲音が響いた瞬間、目の前は再び紅蓮の炎で埋め尽くされた。しかし氷壁はものもしなかった。

そして炎が止む頃、黒煙が晴れ見渡すことが可能になった今、視界に入るのは地面に倒れ伏した二体の白装束と、足元で同じように横たわる残月だけとなった。

(九) 炎獄(後書き)

あけましておめでとうございます。年明けとともに投稿するつもりでしたが、諸事情により未遂となりました(笑)
今年もよろしく願います。

（十） 反革者

（十） 反革者

戦慄から解放され、目で見得る限りの世界での安心にゆっくりと浸たる。銃を足元に置き、手足を地面について脱力する。

「残月」

肩を揺すってはみるものの、目を閉じたまま残月は動かなかった。

溜め息をひとつ吐くと、氷越しに広場を睨みつけた。バベルの放った襲撃者が二人、地面に倒れている。広場は炎が辺りを焦がす音がするものの、感じられるのは静寂そのものだった。

「もう少し堪えてくれませんか。」

残月が言った言葉がやけに頭に残っている。苦笑いを浮かべた奴に、焦りは感じられなかった。寧ろ超然とした落ち着きがそこにはあった。だが何故だろう。

奴は明らかに苦しんでいた。

そう感じてしまうのは何故だ。

何かを待っている。待つ必要がある。だから堪えなければならぬ。だから陽楽、お願いだ。…などというそんな安直な推察でいいものか。だがそれでないとしたら一体、この白装束との攻防の意味はなんだ。

突然右方に倒れていた一人が肩を震わせ、腕を伸ばし、瓦礫を掴

んだ。そしてゆっくりと身体を起こし、立ち上がった。

まだ生きている！

白装束は辺りを見回し倒れている味方を一瞥すると、こちらへ顔を向けた。そしてゆっくりと歩み始め、掌を広げて突き出した。對抗するように銃を構え、引き金を引く。が、発砲が起きない。

――詰まった……！

思わず白装束の掌を凝視し、あの炎が吹き出すのかと身構えたが、その掌は光を放っただけで何も噴出さなかった。

少なくとも、その時はそう感じていた。

そして徐々に異変に気付き始める。

残月が狙撃のために空けた穴が新たな氷で塞がり、氷壁自体も厚さを増していった。冷気もその程度を強め、息を白く凍らせ始めた。

――密閉された。

零下、疎酸素、……死。脳内を冷水が流れ落ちる感覚を覚える。氷をどうにかしなくては。しかし衝撃にも熱にも動じないこの奇妙な氷はいつたいどうすれば排除できるのだ。

助かる望みに影が射そうとしたその時、氷壁の外側が激しい光に包まれた。思わず腕で顔を覆う。それは白装束が放つ炎よりも格段に強い光だった。

腕を降ろし再び氷の外側に目を凝らす。厚い氷に阻まれて鮮明には見えないが、明らかにさっきとは状況が変わっていた。立ち上がり、壁龕の人間二人に止めを施した白装束は再び地面に伏しており、その傍らには奴のものであろう乳白色の丸石が転がっていた。

そして、広場にもう一人、人間が現れていた。

背丈2mはあるだろうか、その体軀は人並み外れて大きかった。

長い髪が後ろで一つに束ねられ、背中まで伸びている。その頭部だけ見れば一見女性のようなシルエツトだが、猛々しく引き締まった体格は男性らしいものだ。

巨人は白装束のそばに跪き、その体を乱暴にまさぐっていた。そしてすぐにそれを止めると、辺りを見回し始め、こちらを向いたときに頭を止めた。そのまま大股で近づいてくると、両手で握りこぶしをつくり、分厚い氷壁に勢いよく叩き付けた。大きな衝撃が内部に伝わり、冷えた空気が震えた。だが氷は碎けない。しかし、ゆっくりと氷が燃えていくのに気付いた。巨人の両手は赤々とした小さい炎に包まれていたが、当の本人は意にも介していないようだ。

そしてついに氷壁が燃え尽き、外の灼熱が壁龕に吹き込んだ。乾燥しきつた熱風に咽せている暇もなく、巨人の掌に檻褸同然となつた上着の胸ぐらを掴まれ、広場の真中へと引き摺り出された。気付けば、残月も同じように引つ張り出されたらしく、少し離れたところで人形のように動かなくなっている。巨人は再び辺りを見回すと、残月の傍らにしゃがみ込み、喉元に指を当てがった。その後残月の体を抱え上げて布袋のように肩に担ぎ、こちらに顔を向けた。

巨人は、黒々とした髪と対称な真っ白な口髭を蓄えた、厳格そうな大男だった。彼は分厚い掌を使って自分についてくるように指示すると、残月を担いだまま広場から出て行った。恐れを抱く余地すらなく、味方であることを祈りつつその背中を追う。

昇降エリアは殺伐としていた。

血生臭い戦場の熱気から洗練された儀式的な妖気に晒される。ホール中に白い布が所狭しと敷き詰められ、それは床に夥しい数の瘤こぶを作っていた。咄嗟にそれが何を示しているのかに気付いた瞬間、吐き気がこみ上げてきた。

中央に何台かの作業台が集められていた。その上では炭塊となり

哀れな顔立ちとなった人体が青白い光を当てられている。そして作業台の間を一人、足早に行き交う者がいた。深い紺碧の制服を纏った彼は、手に何か資料らしきものを持ち、人と紙を交互に見ては片方の手で資料に何か書き込んでいた。こちらが近づくと彼はその穏やかそうな面を紙面から上げ、大男の肩で脱力している残月を凝視した。

「残月じゃないか」

制服の男は大男から残月を受け取ると―体重を支えきれずによるめきながら―ひとつの作業台に横たえた。

「空鐘、他に生存者は？」
ソラガネ

尋ねられた大男はその太い指で俺を指差した。制服の男が顔を向けた。

「あんた、どこの棟の人？」

「Cだ」

「Cなら、こいつの管轄外か。何故残月と一緒にいる？」

「任務中だった」

「反革者か」

頷くと、彼は笑みを浮かべ、そして足元に羅列されている白い瘤を見やった。

「なら話は早い。焼却炉警備、区外任務の奴らと僕ら以外のレジスタンス、本部署にいた奴らはみんな死んだよ。今ここでその遺体の照合作業をやっている。」

「壱雉は」

「まだだ。死んでいるかすら、だ。何か知ってるのか？」

「残月が爺さんと連絡をとっていたのを覚えている。バベルの奴にソフィアを侵されたと、残月は言っていた」

「ソフィアを侵す？」

「できるのか、そんなこと」

男は少し考える素振りを見せたものの、返事は早かった。

「それと全く同じかどうかは知らないが、似た原理を知ってる。個人のソフィアを精錬石に同期させて、その時の散在波数を調べるんだ。その数値は個人を限定できる程合同なものが無いから、最近のヒト管理機構には殆ど使われてる。だけど…」

「操る能力となると別か」

「そうだ」

「なら壱雉はどうなったんだ？」

「それはこいつが起きてからだな」

制服の男は残月を一瞥し、再び資料を手に取ると、白い布の瘤の間を縫って昇降機の方へと歩いて行ってしまった。空鐘がそのあとに追隨していくのを眺めながら、一人佇んだ。

バベルは容赦などしなかったようだ。僅かな感情があれば、消されてしまう。そんな危険に晒されてしまう人々は、この地下世界にどれだけ生き残っているのだろうか。比較的堅牢だと確信していたここ真南区がこの有り様だ。遮蔽物もなく、真っ当に闘う術の無い人々は抗うこともなくその命を刈られていくしかないのか。理不尽、排道徳的な思考が基礎になりつつあり、その弾圧による受難の日々が現実になりつつある。

それは、ただのヒトである俺にも同じことではないのか。

俺は、何も知らない。

闘うための術を、何も。

いや、知ろうとしていなかったのかもしれない。

しかし、判らない。

理解するのに必要なことが多すぎる。

なあ残月。

俺は、何だ。

制服の男と巨軀長髪の男は熱気の籠もる通路を進んでいた。寡黙に歩き続ける二人からは、その足音さえも息を潜めるような沈黙が漂っていた。空鐘が突き当たりの重厚な扉を押し開けると、死体回収の完了した殺風景な管理室が現れた。中央に鎮座していた精錬原石は、黒曜石のような光沢のある漆黒に染まり、かつての半透明の輝きは失われていた。制服の男は空鐘に何か指図すると、彼は首肯し奥の方の扉へ向かっていき姿を消した。制服の男は手近な操作盤に手を触れ、ぼんやりと起動を示す灯りに目を細めた。画面から光が浮かび上がり、彼はそれを指で操りながら溜め息をついた。

「くそ」

彼は光の弧をいくつも描きながら、幾度もそうつぶやいた。

（十一） 錬金術師

（十一） 錬金術師

「血色は悪いが、まあ大丈夫だろう。血圧、心拍、精神状態、五感性能、各間接部位…、全て良好だ」

「そうか」

「残月の旦那が血色悪いのはいつものことだ。よかったな、相棒」

淡雪はそう言つてにやけた。
アウユキ

心配などしていないが、結託を瑣末にする理由もない。だからか、「相棒」という言葉はどこか便利な響きを含んでいた。淡雪の表情に肩を竦めて答え、死んだようにも見える残月の、文字通り青い顔を一瞥した。

淡雪と空鐘は真南区レジスタンスの根幹である中央指令部直属の錬金術師であった。

精錬原石が暴走を始めたちょうどその時、彼らは町中の任務に当たっていた。そして本部からの連絡を受け、直ちに急行するよう指令が下ったのだ。…だが、この状況からして惨事を免れることはできなかつたらしい。

「最初の襲撃が他区画だったとはいえ、情けない。せめて同士達の弔いだけでもしてやりたかつた」

淡雪の言葉に、寡黙な巨人が頷いた。

「残月から連絡を受けて此処の防衛を任された。…勝算はない、と

はつきり言い切って、住民の避難に全力を注ぐよう指示された。お堅い冷徹な上司にも、一応の配慮と慈悲はあるもんだな」

目を閉じて横になっている残月の顔を見下ろす。頬はこけ、明らかに血色が悪いその表情は、病に伏した人のような形相だ。しばらくはその瞼を開けることはないだろう。

「淡雪、錬金術は元来体力の消耗が激しいものなのか」

「惜しいね。厳密に言えば、精神の消耗、だ」

「精神」

「そうだ」

淡雪は懷から精錬石を取りだし、胸のあたりで構えると、握りしめた。すると石は淡く光りだした。

「錬金術はこの石を介して増幅されたエネルギー準位転換現象の総称だ。たとえばこの光。光は即ち熱、熱は即ち運動。そこまでは基本概念通りだ。しかし、錬金術では運動を供給する源が少々変わったものになっている。なんだかわかるか？」

「さあな」

「ソフィアだ。こいつは、尽きることも満たされることもない、常に不飽和、無尽蔵の物質だ。だからこそ、安定を求めて活発に働き、生命力の源ともよばれるようなエネルギーを生み出すわけだ。そもそも――」

どうやら輿に乗ってきたらしい。彼は雄弁に語り続けたが、しかしこちらは傾聴する気にはなれず、空鐘が虚空を見据えて突っ立っている姿をぼんやり見ている他なかった。ひけらかされているその知識はそのテの人間にとっては見事なものなのだろうが、如何せん理解するための材料の持ち合わせがないために、結局、終わりの見

えない講義に水を差す形となった。

「…掻い摘んで言ってくれないか」

「ようするに、長時間の行使は疲労困憊の原因になりうるってことだ」

「それだけか」

「ああ」

おそらく執行者本人にはその結果などわかりきっていることだったのだろう。精神力を尽くしてまで成し遂げなければならぬものが、残月にはあったのだろうが、いまはそれを聞くことができない。もどかしい気持ちに揺さぶられていると、淡雪が残月の作業台に放置していた資料を引き寄せ、その用紙の裏側に筆を走らせ始めた。その筆跡は次々に円と線を描いていく。

「何だ、その円と模様は？」

「これは模様じゃない、数字だ。…まさか君、ローマ数字を知らないのか」

「聞いたこともない」

「なんと」

彼は小さくため息をつきながらも、さらに線と円を増やしていった。円からは多数の線が伸び、その先には似た大きさの円がつながり、その円同士もまた線で繋がれている。そして徐々に、その奇妙な線と円は、ひとつの大きな三角形をなすようになった。その頂点といくつかの円に、数字が書かれていった。

「先刻、^先このデータベースから抜き出してきた各地域の現状だ。数字はレジスタンスが拠点を構えているところを示してある。…正直、僕でさえこんな情報を見たことがない」

「どういうことだ」

「植民地時代に作られた居住区は、バベルを中心に環状に広がっていると、そう報告されているし確認もされている。実際、僕も目にしている。だが、報告そのものが贋作にせものだったんだ」

淡雪は線と円で描かれた三角形の重心を指し示した。

「普通に考えれば、ここがバベルだと思うだろう。だが本当は、ここだ」

次は三角形の一番上の頂点にある円の中心を指し示した。

「つまり、僕らはこの円周に沿って居住区を構えているということになる」

「待て。もしそうだとするなら、その他の無数の円は何なんだ？」

「さあ？ わからない」

淡雪は肩を竦めた。

「地上へと伸びるシャフトか、はたまた旧大国の巨大シエルターか……。想像は膨らむばかりだね」

そんな彼の楽観したような物言いを制するように、空鐘が掌を返した。淡雪はそれを見るなりバツの悪そうな顔をし、図面に目を落とした。

「かき集めた資料のなかに本部データベースへのアクセスキーがあった。この情報はそのデータベースにあったものの一部なんだが……。先刻も言った通り、確かに調査報告を受けて確認した通路や居住区は実在するものだ。だが、その他の地域については知り得なかった。

つまり報告を行った人物、あるいは組織、あるいは機関が、何らかの理由でその他の地域の情報を隠蔽していた…、ということになる」「あるいは、だと？ 調査を依頼した先が何なのか分かってないのか」

「この情報はこの本部が持っているデータに過ぎない。出どころは全て壱薙が把握していたんだ」

「あの爺いか。…胡散臭さが目に見えるようだな」

「ああ、全くだ」

急襲の原因をつきとめるための肝心要が見事に欠けている。淡雪は恐らく、データベースの情報からバベルの意図を探ろうとしたのだろう。

「問題は、壱薙が贋作の正体を知っていたか否かだ。調査依頼を出したのは確かに壱薙だが、その報告をレジスタンス達に各自確認するよう情報を公布したのも彼だ。卸売のような立ち位置に居る彼なら、少なからず情報の隠匿は可能だったはず」

「依頼先の意図によるものの方はどうだ。だがその方は、バベルがこの区画についてどこまで把握しているのかを知る必要があるな」

淡雪の口元がまたにやけ始めた。

「…陽楽、君はここに来るまでに、ここの情報はどれくらい持っていた？」

知るはずがない。擬態壁による隠し通路の奥であり、奇怪な石によつてようやく開く道の先の世界なのだから。

「ひとつも持っていなかった」

「そうさ。知るはずがない。…ここは存在しない居住区だからな」

「どついつことだ？」

真南区。バベルを取り巻く東西南北に伸びた地下植民地跡のうち、真南に位置する居住区。そうしてその後、残月は町について誇らしげに語ったはずだ。

「植民地計画を企てたお偉いさん方の手元の資料では、この区画は廃棄物処理区画として明記されているんだ。…もうわかるだろう？」
「ようは、この居住区を作ったやつらは、監視の目の穴を見つけたってわけだな」

「う」名答

淡雪はわざとらしく両手を挙げ、降参の姿勢をとった。

そうだったのか。この真南区はレジスタンスが一から作り上げた居住区だったのだ。監視の目を逃れて拠点を構えるために、彼らは廃棄物処理区画となるはずであったここを、居住区画へと変えてしまったのだ。

「廃棄物処理が目的なのだから、その焼却溶炉の監視管理以外、人が立ち入るための目的などない。おまけに、“安全上この区画への他区画住民の立ち入りを防ぐためにシエルターを繋ぐ通用路からの道を埋める”という偽の報告も流した。結果上手くいき、精錬石による擬態を講じることができた。これら諸々の策を講じてきたから、ヒトの手によらない管理システムを完璧にし、全て現行システムに適応させたバベルにとって、現在この区画はただの焼却溶炉区画、という認識でしかない筈なんだ」

「しかし、バベルは白装束をわざわざ焼却溶炉なんかに差し向けた。…おかしいな」

「ああ。まるでここに敵が潜んでいることを知っていたみたいに、な」

となると、内側からバベルに情報が漏れていた、あるいは独自に突き止められた、この2つ以外考えられる原因はない。後者は尾行や諜報工作を仕掛けられていたかどうかを調べるしかないが、前者の場合は外部組織と連携があるという事実が存在するだけ現時点で最も疑わしいところだ。そして淡雪はそこに潜む内通者を疑っている。つまり、壱薙を、だ。

「壱薙が贗作の正体を知っていたなら、今回の急襲はそこから情報が漏れたとしか考えられないんだ」

「いや、まだ思い当たる原因がある。俺と残月がバベルに追われていたというのを先刻話したのを覚えているだろう」

「ああ。だがそれはそれほど問題じゃない」

「なんでだ」

「残月の指揮していた例の作戦はこの区画の管轄外だからだ」

あまりにもさらりと受け答えられてしまったため、言葉につまる。残月の作戦はこの区画の管轄外だと？

「…もつと言え、こいつの独断による諜報工作の一端だ」

「独断、だと？」

淡雪はため息をついた。ふと目線をずらし巨躯の空鐘を見れば、彼もまた肩を竦めてみせた。

「世話の焼ける上司だよ、全く…。空調施設然り、食糧施設然り、遡れば第三期クーデター戦争の時もそうだった。あいつはどうやらバベルのウラを洗い出たくて仕方ないらしいな。お蔭でこっちのアシを洗うのが大変だったよ。尤も^{もつと}…」

そう言つて彼は残月の方へと顔を向けた。

「こいつ程、真南区の住民のために尽力した錬金術師はいないがな」

淡雪の言葉に釣られるように、自分ももう一度残月の顔を見下ろす。

冷血しかめぐつていないように思っていたその身体は、今は少し幼い年相応の青年の姿として、目に映つて見えた。

「しかも、彼らはバベルの仕向けた追つてである、とは言い切れない」

「何故だ。食糧監査を取り仕切つてるのは間違いなくバベルだろう。どうしてそうなる」

「食糧監査選別施設は、知つての通り完全に無人だ。残月がそのメインルームを根城にできるくらい、あそこはスカス力なんだ。…まあ、存在しない区画に籍を置いているからこそできる事なんだが、ともかく、余程のヘマをやらかさない限りあそこでバベルに嗅ぎ付かれるということは万が一にもない」

淡雪はそこまで言つと、白い瘤を跨ぎ越しながら近づいて来た。

「それより、話から推察するに、そもそも君が連れてきた追手なんじゃないか？ 違うか？」

凶星だ。

「君が一体どんな餌を撒いてくれたのは知らないが、僕は思うに、君がもしバベルに何らかの理由で見つかつていたとしたなら、君は間違いなく逃げる間もなく其処で死んでるよ」

「なに…！」

歩み寄ってくる淡雪につかみかかろうとすると、指先が触れるか触れないかといった間隙で手が何かによって弾かれ、反動でバランスを失った体が後方へとよろけた。その瞬間、淡雪が小さく笑うのがちらりと見えた。

「縦横無尽の監視網はどこからともなく白装束を放り込める。走って逃げようなんてまず無理な話だ。ましてや丸腰の人間なんか、ね」

そう言って淡雪は乳白色の丸石をつまみ上げ、これ見よがしに振って見せた。

「だが君はまだ此処に居る。大方、どこかの小規模な反対勢力にでも目をつけられたんだろう」

淡く灰色に光るその石は、やはりいつみても禍々しく、そして鬱陶しい。

こんな色をして光るのは、人の心がやはり汚く淀んでいるからなのだろうか。

淡雪は石を懷にしまうと、大股で瘤を跨ぎホールの入口の方へと向かいながら言った。

「…しかし、こうなった以上、乗りかかった船つてやつだな。残月の旦那には悪いが、ちよつとばかり彼独自の情報網を利用させてもらうよ。何せ、壱雉以外で唯一外部区画との連携がある遊撃騎士だからな」

…そうか。彼は少なからず、残月もまた、一人の容疑者にとらえているわけか。残月とともにバベルの情報を集めるということに協力し暗躍するという意思を仄めかしたつもりだろうが、外部への情

報漏洩が急襲の原因だと断定しているのも彼であるが故、この男は条件を満たす者を徹底的に疑うつもりなのだろう。

そして間違いなく残月も、その例に漏れない。

また面倒な「相棒」ができたもんだ…。

そう呟きかけて慌てて口を嚥む。

その様子が拳動不審に思えたのか、空鐘がいぶかしげな目でこちらを見ているのが目の端に映った。

(十二) 錬金術師(後書き)

更新遅くなりました。

この後のお話をようやく整理し終えたので再始動です。
気長に待ってやってください!!

（十二） 再起

（十二） 再起

瞼を開ければ、そこには見慣れた天井がぶら下がっていた。
視界はぼやけており、記憶の片隅にあるイメージでそれを見つめる。

あの蒼い石を敷き詰めた天井は、いつぞや対立した改革派のレジスタ達が放った錬金術の産物だ。

…生きてるのか。

ただの消耗とは言え、それは少なからず身体に影響を及ぼすはずだ。

それがこの程度の気絶で済むとは。

精神は生命に全く干渉していないとは言えない。
むしろその逆だ。

血流の如く身体を巡り、生命を形作っているのが精神なのだ。血が生命の活動そのものの源なら、精神はその器と言えよう。

精神が瓦解すればその生物を形作る生命エネルギーは脱兎の如く宙に霧散し、生物は軀を残してその活動を止める。

但し、死骸になるのではない。

血の通った身体は温かく、肺呼吸の様子も見取れる。

言うなれば、恒常性をもち、種々の遺伝情報や酵素を抱えた有機物の「塊」だ。

美しき生命活動は、その主人を失ってもなお続けられるのだ。
しかし一般に、通念や法律はそれを「死」と扱う。

…当然だ。

元の精神がない、つまり個を失ったただの塊なのだから。個性を敬い責ぶ人々にとっては、それは死以外の何物でもない。

そして自分自身も、そうなる虞があった。

いや、どこかでそれを望んでいたのかもしれない。

救いようなない現実から逃れるために、死という平安を望んでいたのかもしれない。

だからこそ、万が一の死を覚悟していたのだが、生憎どうやら耐え抜いてしまったようだ。

視線を横にずらす。その瞬間、鼻腔を臭気が刺激した。そのあまりの不快感に顔をしかめる。

床には夥しい数の瘤ができ、それは白い布を被せられていた。

思わず戦慄する。

そして脳は徐々にその真実を受け止め始め、やがてやり場のない悔恨に締め付けられた。

守れなかった。

俺の…。

「残月。起きたね」

穏やかだが少しピッチの高い声が頭の向こうから呼びかけた。

体を台から起こし振り返れば、そこには見慣れた紺碧のローブに身を包んだ見慣れない男が立っていた。視界は相変わらず悪く、輪郭はぼやけ、それが誰なのか見当がつかない。

「連れの人と心配していたよ。機嫌はどうだい？」

「…誰ですか」

ローブの男は大げさに腕を広げると細やかに笑った。

「なんだ、冗談まで言えるまで回復してるなら、申し分ないね。……
いや、むしろ驚愕に値する」

「誰ですか」

「淡雪だよ」

ローブの男は「冗談を、とばかりに肩をすくめた。

「アワ、ユキ……？」

名を聞き返せば、淡雪は怪訝そうに腕を組んだ。

「……おいおい、まさか本当に――」

「……冗談です」

未だしかめ面を解かない淡雪を見ながら苦笑する。

忘れられるわけがないだろう。

しかしそんな言葉を口にした暁には、淡雪に冷やかしを食らうことは明白だ。端的に、状況を伝えてもらうことにする。

「その後はどうなりました？」

「壊滅さ。肝心の壱雉も行方知れずだ」

「……そのようですね」

お互いの間に沈黙が満ちる。

……何もかも灰塵に帰してしまった。

たった一度の襲来で、これほどまでの被害が生じるとは。

「他の者達は？」

「…本部内は生存者ゼロ。居住区、区画外の管理及び遠方任務に就いている者以外は全員殉死だ。だがしかし、生存者達との交信は無理だ。原石が沈黙したからな。…通達通りなら、今ごろみな嶺雁^{レイガン}の所へ向かっているだろう」

「…ということは、準備が整ったのですか」

「いや、そうじゃない。攻め入る好機を伺うと言った方がいいかな」
「それでは…」

「情報元が潰れた以上、今まで以上に諜報力が必要とされている。そう、まだ振り出しに戻ったわけじゃない。これは好機だ」

「根拠は？」

「ない」

「ないのになぜ」

「それはこれから証明する」

自信に満ち満ちた口調だが、その信頼性は現時点では皆無だ。

…科学者はまず事象を全否定する事から検証していくという。そしてその否定的仮説が棄却されるような結論を導いていき、自分が真に実証したかった仮説を認めさせるという天の邪鬼的論理方法をとっている。

初めて直面する事象には仮説、つまり推測でしかものが言えないのは確かだが、それでも根拠や理屈は少しは存在しているものだろう。

「…根拠はない。だが、変わった状況を肯定的に捉えることはできる」

淡雪は懷から筆記具を取り出し、戦死者名簿を裏返して走り書きした。

「今までは保守的にならざるを得なかった。だがこれからは違う。直接顔を突き合わせなければいけない一方で、手には入る情報も圧倒的に増える。さらにいえばその情報は、かなりの信頼性を望める筈だ」

走り書きの内容は何かの地図のようだ。そして、そのうちの幾つかの地点やそれを繋ぐ通路には思い当たる地形があった。

「これは…、嶺雁の隠れ家への道程ですか」

「隠れ家とは失敬な。我等が嶺雁將軍の最重要拠点、だろう」

「…僕はあまりあの方が好きではありません」

率直な感情を伝えると、淡雪がそれに卑しいにやけ笑いで応えた。

「おや、意外だね。道行く誰もが振り向くようなお方であるのに」

淡雪は背を向け、あらぬ方向へ向かって喋りだした。

「そう、世間はこう囁し立てているだろう…。歴戦を経た剛勇無双の兵士でありながら、才色兼備、ひと度戦場を離れば、それは立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は―」

「…歩く姿は蠅取草」

不意を突かれた淡雪が振り返る。

「どんな男も絡めとるってことかい？ うん、確かにそれもありだな。ということはなんだ、君もその蠅取草の甘美な香りに誘われ、拳句とって喰われた哀れな小蠅だったのかい？」

「…とにかく、何を目論んでいるのかは知りませんが、僕は彼女の

指揮下には入りませんから」

この男の挑発癖はどうかしなければならぬ。人の心の琴線を弄ぶなど、錬金術師として非礼極まりない。

淡雪が再び嶺雁の話を切り出し、世辞なのか本音なのかという境を彷徨いながらも、その言葉の端々からは嫌でも容易く彼女の姿が想像できた。

「進路は君の勝手だが、嶺雁に会うところまでは付き合ってくれよな？」

「少なくとも、レジスタンスの現状を把握するところまでは一緒にしましょう」

「決まりだな」

ふと気付けば、陽楽が側に立ってしかめ面をしていた。彼は走り書きを一瞥した後、口を開いた。

「誰なんだ、そのレイガンてのは」

「彼女は僕らレジスタンスの高嶺の花であり頼もしい首領でもあらせられる素晴らしい將軍さ」

「女性なのか」

「不満かい？ まあそう思うのも無理はないが、女性が頭になるというのは実に理に適っている戦略なんだよ」

陽楽はそれでも不満そうだ。

無理もない。重量のある武器や兵器を扱う戦場ばかりを渡り歩いてきたのだから、どうしても非力がちな女性が兵を束ねているという事実を聞けば、違和感が生じるのは明白だ。

「錬金術が戦場の優位を占めている以上、精神力が物を言うのが現

状だ。そして言わずもがな、その源はソフィアだ」

「そこで何故女性なんだ」

「単純だよ。女性は男性よりも心理性に長けているんだ。一部を除いて、古くから女性はスピリチュアルで謎に包まれた存在として敬われていたし、その体内には神を宿しているとさえ言われていた。

この例は明らかに非科学的ではあるが、事実、女性のソフィアが周囲に与える影響は男性のそれよりも強く、多種多様だ。…なに、錬金術の実用化に成功したのも、ほかならぬ一人の女性科学者によるものだというのは有名な話じゃないか」

「蘊蓄なんかどうでもいい。統率がとれているなら、俺は文句は言わない」

「いずれにせよ、会えばわかるさ」

淡雪はそう言って笑い、書類を手際よくまとめていた空鐘を呼び寄せた。

「さ、出発だ。白装束が残兵狩りを始めないうちにとっと出よう」

白い瘤を跨ぎ越しながら、淡雪の背を追ってホールの入口へとむかう。

恐らく、もうここへ戻るのはずっと後のことになるのだろう。

未練がましく喚くつもりはないが、それでもこの奇襲はあまりにも非情だ、残酷だ。

住民たちが君らに何をした？

心行くままに日々を過ごし、平穩無事に暮らしていただけなのに。バベルは、心があるという、たったそれだけの理由で命を狩っていった。

何故。

何故そこまでする必要がある。

俺には、知る権利がある。

そのための回復を急がねばならない。

戦うことは避けられないのだから。

…だが、陽楽はどうだ。

真南区、もとい本部を失った以上、陽楽の僕らに追従する義理はなくなった。事実上のレジスタンス解体を目の当たりにしているのだから、彼は実際、再び流浪の民に戻ろうと思えば出来てしまうのだ。

「陽楽さん」

ゲートが開かれ、未だに灼熱の籠もってしる真南区から膨張した空気がなだれ込んで来ている。巨躯の空鐘を盾にするように進んでいた陽楽が振り返った。

「なんだ」

「まだ、僕らと共に戦ってくれるのですか」

「当たり前だ。他にどうしろと」

陽楽はバベルの深層を知りたいのだと壱薙に言っていたが、そもその理由は何なのだろう。

今ここに来て漸くそんな疑問が湧くとはあまりにも気が抜けている。今思えば、陽楽を本部に連れ込んだ際、素性の知らない暴漢を組織に引き入れるようなもののように壱薙には映っていたのかもしれない。

「…こんな事に巻き込んでしまって、申し訳ありません」

陽楽の顔が少しばかり引きつったのが見て取れた。
機嫌を損ねたのだろうか。

「何を今更しれつと謝ってやがる。そんな風に思っていたらハナからお前と連れ立ってこんな所まで来ちゃいねえだろが」

ふつと溜め息とともにきびすを返し陽楽はホールから出ていった。

(十二) 再起(後書き)

試験期間中の投稿です。：なにやってんだか(笑
次話は実家に帰省中に書き上げようと思うので、8/15くらいに
なると思います。

相も変わらず不定期投稿ですいませんorz

(十三) 西区へ、？

(十三) 西区へ、？

真南区を守ってきた擬態壁が解除され、再びどこまでも無機質な通路が目の前に現れた。

気配はない。匂いも音も、眩い光もない。緩やかに弧を描く通路は視界を限定し、当たり前のように蔓延る暗闇がそれを助長する。自分自身も栄養不足が祟ってか、ひどい鳥目状態に陥っている。

「二つ連絡塔を越えた先に第四西区がある。この場所には2人の駐在が居るはずだ。…生きていれば合流しよう」

壁伝いに先を歩く淡雪は、石を使わず灯りをつけないまま進んでいた。残月と俺は淡雪を目視で確認できる限界の距離をあげながら後に続き、後ろからは空鐘が大腿で追いかけていた。

この通路は気味が悪い。

優良な衛生状態ではないにしろ、不衛生でもない。心地良い気分を誘う環境でもなければ、酷い不快を感じさせる環境でもない。それは人が生活する公共の場所ではごく当たり前の感覚なのだろうが、ここには公共性のもつ限られた地平線上での自由というささやかな解放感がないのだ。見通せない通路が心理的な緊張を生んでいるのかもしれない。

「第四西区といえば、陽楽さん御用達の喫茶があるとこではなかったですか？」

残月が唐突にそんなことを口にした。だが生憎、レジスタンスの使う区画の呼称など知る由もない。

「喫茶…。あの銀髪の紳士がいるところかい？」

「知っているのか」

「知っているものにも。彼もレジスタ、錬金術師さ」

残月が片眉を吊り上げた。どうやら初耳だったらしい。

「あの方、同志だったのですか」

「ああ。だが少し、彼には難点があつてね」

淡雪が歩みを止めた。先を窺うと、道が5、6本交わる場所に突き当たっていた。所詮はただの通用路である上、そもそも人間が直に通うことを目的としていないため、目印や標識はない。淡雪は懷から丸められた地図を引っ張り出し確認を始めた。

「君らはもちろん知っているだろうが、石を使った交信法には少々弱点がある。目的の人物の記憶が曖昧だと、届く内容も曖昧なものになるというのがそれだ。ひどい場合だと届きさえしない。だから記憶力に乏しいとこの通信手段の使い勝手は非常に悪くなる」

淡雪は地図を懷にしまい、壁伝いに広場へと歩み入った。残月と俺もそれに追従する。

「彼は記憶力そのものは良いんだが、どうやら人の顔を覚えるのがとても苦手らしくてね。こちらから情報を伝えることはあっても向こうから伝わってくるのではないんだ。前線付近の貴重な情報源になるんだが、如何せんこれではしょうがない。かと言って他に回すことも考えられなかったし…」

「妙ですね」

再び曲線を描く通路へと戻り、進みかけたときに残月が呟いた。

「陽楽さんの顔は、どうやら覚えられていたようですね」

確かに、言われてみればそうだ。

「陽楽はその常連だったんだろ？ おまけに繁盛していないのが見て取るように判る店だ。そんなところでご贔屓の客を忘れるという方が難しいだろう」

「自分の所属する秘密組織の幹部の顔を差し置いて、それでもですか？」

「顔を合わせる機会ほとんどない。当然だろう」

「それでもあなたは覚えているではないですか」

「仕事だからね」

「では彼も同じように記憶するよう努めるべきではないですか？
あまりにも無責任です」

「…やけに噛みつくね、残月」

淡雪が苦笑を漏らすのを聞いた。

だが俺は少々笑えない気分だ。

「人の姿や顔といったものは、その人間の背景次第でいかようにも人の心に入り込めるものです。身を脅かす^{おそ}惧れがある対象なら尚更、反射的に優先されて記憶されるものです。仮にあなたの方が記憶能力に難があるとしても、学習障害の類が関与しない限り覚えていないということはあり得ません」

「…人の思考や行動を推察するときに、あり得ない、は存在しない」

淡雪がそういうと、残月は黙り込んだ。

「人の心ほど科学するのに魅力的で、定義に難儀なものはない。精神分析、行動学、臨床心理学、ひいては統計学や経済学などの分野が、今日まで体系づけるために苦心してきた。数ある思考や行動のひとつひとつが異なる以上、平均化したデータからの推測はできるものの、個人の未来の行動の推測なんてものはあくまでも憶測の域を出ない距離内でしか議論はできない」

「確かに人の行動は断言できるものではありません。ですが話を逸らさないでください。僕は疑う余地のあるものがあるのに何故それを避けるのかを聞いています」

「なぜそこまで突っかかる？ 彼は今僕らの行動に関係ないだろう。僕らは嶺雁將軍と接触を図るために第二西区へと向かっている。それだけだ」

通路の端を生温かい風が通り抜けている。熱源があるということ、は、もうそろそろだろう。

淡雪は銀髪の紳士、あの寂れた店の主人に、どの程度の信頼を置いているのだろう。一方通行な情報交換ほど不利益で奇妙なものはないと言うのに。これではただの情報の垂れ流しだ。そしてそこに群がるのは画策のための材料に飢えている反乱因子達やバベルそのものだ。

「彼のことは疑わないのですね」

残月は淡雪にさらに詰め寄った。

「彼は関係ない」

「何故言い切れるのですか」

「言っただろう、記憶力に乏しいと。いいか、おそらく君はこんな

邪推に囚われている。…彼はスパイなのではないか、と。違うかい？」

淡雪の言葉にハツとする。

そう、それだ。

バベルとそれに対抗する組織のお互いの監視が入り乱れる城下町ならば、両者の動向は目と鼻の先だ。探りを入れることは容易く、手に入る情報には労力に見合うどころか余りある位の価値がある。そして、冷戦状態であるあの地域で見事に中立的立場を作り出しているあの店が、両者の情報を手元に揃えることができるおそらく唯一の場所であろう。

密偵として雇われていた可能性は十二分にある。

「もし彼が二重、いや、それ以上の組織と共謀していた場合、真南区の場所が割れた原因として真つ先に疑われるのは間違いなく彼だろう」

「じゃ、あの店の主人が他組織と連む可能性はハナから考えていたって事か」

「ああ」

淡雪は何ともなしに即答する。

「それでも、僕には彼を疑う理由はない」

「何故です」

「彼に情報を与える役目を負うのもまた、僕だからさ。彼の知りうる僕らの情報は全て僕が操作している。そして僕は僕らに関する情報の一切を彼に与えてはいない」

「では一体何を、教えていたんですか」

「それは…、君が知ることではない」

淡雪が返事をする、残月はまた口を開いた。

が、その先は空鐘が前に躍り出たことにより遮られた。空鐘は手に石を持ち通路の中央に仁王立ちした。

「…静かに」

淡雪が壁を背に張り付き、体を縮めた。反射的にそれに倣い、耳をそば立てた。

足音が聞こえる。そしてどうやら、これはひとりふたりという単位ではないようだ。

「狭いうえに一本道。迂回できるルートもない。…正面突破しかない」

淡雪はそういうと懷に地図をしまい、代わりに乳白色卵型の石、精錬石をとりだした。残月は既に石を取り出し、床に片膝を立てて構えている。

自分も自然と身体が動き、腰にある銃に手をかけていた。しかし、残月は俺に待機を命じたのだった。

「陽楽さんは下がっててください」

「なんだと？」

「錬金術の戦いにおいて拳銃はおるか銃火器全般は役立たずだ。というより、クーデターの残党ならそんなこと百も承知だろう」

「淡雪！」

残月が小さく怒鳴ると、淡雪は、失敬失敬と薄ら笑いをして黙り込んだ。

第三期クーデター戦争は蹂躪政策に反発した一般人と理想郷を唱

えた錬金術師達の圧倒的戦力差が際立った戦争だったことは確かだ。反乱軍が一国の軍隊にも劣らない武器や兵器を携え戦ったにもかかわらず、錬金術に対し全く歯が立たないまま一方的な敗戦を期したのだ。

淡雪の挑発とも嘲りともとれるその言葉は、戦力として数に入らない自分の情けなさを抉り出した。

「伏せて！」

残月が叫ぶと、視界奥の闇の中から轟音と共に勢いよく突風が吹き荒れた。身をかかめてやり過ごしていると、周囲の壁に夥しい数の罅や亀裂が入っていくのが見えた。通路の床も鋼鉄の剣で斬りつけたような痕が無数に刻まれ砕けていくが、屈みこんだ残月と空鐘を先頭に淡雪と俺を囲むような楕円形の範囲内には少しも被害は及んでいなかった。

「残月、そのまま頼むぞ」

淡雪はそう言うつと残月の背後に立ち、石を握りしめたまま大きく振りかぶった。

そして勢いよくその腕が振り下ろされると、手が辿った軌跡の形で金属とも氷とも似つかない刃が生まれ、音もなく闇に向かって噴き出していった。数秒後、何かが倒れる音が^{こだま}、突風が凧いだ。

「今だ、進め！」

残月が飛び出し、遅れて後に続く。

衝撃を受けて砕けた壁や天井から零れ落ちた破片が床に散らばり、駆ける足に蹴飛ばされて耳障りな音を立てた。

「来ます！」

残月が叫び、立ち止まると両手を前に突き出した。それとほぼ同時に地面から氷柱が突き出し、間もなく真つ赤な炎が氷柱に直撃した。氷柱は衝撃で震動しつつも全く崩壊する気配がなく、見事に炎を食い止めている。しかし熱は氷柱を回り込み、辺りの温度は急激に上昇した。

炎が止むと同時に空鐘が氷柱の先へ駆けて行った。残月、淡雪もそれに倣う。

後を追えば、白装束を纏った人間が二人、空鐘の鉄拳により壁に叩き付けられる瞬間を目の当たりにした。見渡せば、腹部を切り裂かれ真つ赤に染まった白装束が何人も床に倒れ伏している。

壁に叩き付けられ床に臥した白装束二人は、残月と淡雪に石を向けられると制止し、沈黙した。どうやら、心は無くとも、勝敗の区別はつくようだ。

淡雪はうずくまる白装束を見つめると、眉間に皺を寄せた。

「君ら、バベルの手駒じゃないな？ 一体何者だ？」

どうということだ。

白装束を纏った錬金術師はバベルの放つ手先ではないのか。

白装束二人はそれには答えず、懷からナイフを取り出すと止める間もなく自ら首元を切りつけて自害した。

残月がそれを苦々しい面持ちで見届け、すぐに目を背けた。

「死人に口なし、か。…全く、こりゃいったいどうなってるんだ」

淡雪が吐き捨てるようにつぶやいた。知性に溢れた穏やかな顔からは想像もできない闘争心が彼からは滲み出ている。その表情は殊

更に憎々しげだ。

「淡雪、バベルの手駒ではないという根拠はどこからきてるんだ」

尋ねると、淡雪は目の前で死んだばかりの白装束を指差して答えた。

「見てみる。こいつら、石を持っていない」

それを目で確認し、再度周りを見渡してみる。空鐘が何体か遺体をまさぐっていたが、結果は同じようだった。

「石を使わず錬金術を起こす技術、ですか。そんなもの、聞いたことがない」

「同感だ。これは、バベルが新たに開発した戦闘技術なのか、それとも全く別の錬金術師団が組織されたかのどちらかとしか考えられないな」

「別の錬金術師団？ レジスタンス以外にも塔から降りた錬金術師が？」

「居ると仮定すれば、の話だけだね」

二人の考察に耳を傾けながら辺りを眺めていると、ふと目にひとつの遺体が入り込んだ。

その遺体の手には極薄の手袋が嵌められていた。

よく見れば、その他の遺体も同じような手袋を嵌めている。

「おい、二人とも。錬金術とやらは手袋を嵌めても起こるものなのか」

「手袋？」

「…見てみよう」

淡雪が足元の遺体の傍に屈みこみ、手から手袋を抜き取った。
素手と同系色の極薄の手袋で、遠目からでは手袋を嵌めているとはとてもわからない。さらに、淡雪が手袋を裏返した途端、全員が目を見張った。

手袋の内側に、一枚のポラロイド写真が貼ってあったのだ。

「…男性と女性のツーショットですね」

「ポラロイドなんて今じゃ化石のようなものだ。それだけで驚きなものに…」

空鐘が白装束のフードを外すと、そこに年若い青年の顔が現れた。眠るような顔をして息を引き取っている。

「後味悪いなあ…」

「その割には全く困った顔していないようですけど」

「その台詞、そっくりそのままお返しするよ」

そんな二人の会話を耳にしつつ、写真の貼り付けられた手袋を手にとった。

青年と女性が肩を組み、笑顔でこちらを向いている。実にほほえましい瞬間だ。

戦いに赴く愛する人に、せめてもの心の逃げ場をと、この女性のささやかな配慮であったのだろう。

正当防衛とはいえ、偽善染みてはいるが心が痛むのは避けられなかった。

そして、こんな人情に溢れたことは、バベルにはできない筈だ。

この地下世界には、レジスタンス以外にもバベルに刃向う錬金術師が存在する。そう確信した。

「陽楽さん、先を急ぎましょう」
「あ、ああ」

手袋を懷に潜り込ませると、二人の後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7625m/>

BABEL

2011年10月7日08時21分発行